

はじめに

太田南地区の風土や文化を歴史と民俗学の観点から調査・研究する太田郷土史誌研究会が2014年5月に発足して8年目になります。

これまでの7年間、主に太田南地区に残された史跡や貴重な資料を収集・研究し、パンフレット等にまとめ、地区の皆様にお知らせしてまいりました。

特に、2015年度は、高松市の「ゆめづくり事業」に参画し、それまでの蓄積をリーフレット・資料集などにまとめるとともに、太田南コミュニティセンターに総合案内板を、各史跡に現地説明板を設置し、地区住民の方に太田南地区の風土や文化を広く知っていただくツールを整備しました。

2021年度は、コロナ禍の下で、「夏休み子ども教室」やコミュニティ協議会の「文化祭」が中止になりましたが、引き続き史跡や貴重な資料の収集・研究と秋のウォーキングは実施することが出来ました。

2021年も、新型コロナの脅威の中、太田南地区コミュニティ協議会が徹底した予防対策を行っていただいたことで、例年に変わりなく活動が行えたことを感謝しております。

ここに、2021年度の活動報告書をまとめることができました。この活動が地域の皆様に少しでもお役に立てれば幸いに思っております。

太田郷土史誌研究会会長 中澤健二

目次

第Ⅰ編 活動編	2
1. 2021年度のあゆみ.....	3
2. 年度計画.....	4
(1) 活動事業名.....	4
(2) 活動計画.....	4
(3) 予算.....	4
3. 高松ケーブルテレビ取材への協力.....	5
4. 讃岐国分寺跡資料館での研修.....	6
5. 太田郷土史誌研究会ホームページの立上げ.....	8
6. 2021年度「史跡と出水めぐり」ウォーク（医療生協殿との共同開催）.....	9
7. 2021年度「史跡と出水めぐり」ウォーク.....	10
8. 太田中学校地域学習（郷土の歴史コース）への協力.....	11
9. 太田南小学校地域学習への協力（大住教夫）.....	17
10. 現地説明板の一部撤去と補修.....	18
11. 「太田南の昔ばなし」第1集の増刷.....	18
第Ⅱ編 調査研究編	19
1. 資料収集.....	20
(1) 「太田南地区の水利図」～高松市太田土地改良区管内図～.....	20
2. 調査研究.....	23
(1) 大野・一宮地区の出水調査.....	23
(寄稿) 高松平野南部大野・一宮の出水観察記録－1980～1990年代の写真から－新見 治.....	33
(2) 太田城跡の発掘調査観察記録.....	38
安藤みどり.....	38
(3) 戦争の記憶①～日清戦争からアジア太平洋戦争まで～.....	43
安藤みどり.....	43

第 I 編 活動編

1. 2021年度のあゆみ

2021年4月2日(金)	4月度 郷土史誌研究会 (5月度は、コロナ対策のためコミュニティセンター休館、研究会もお休み)
2021年6月4日(金)	6月度 郷土史誌研究会
2021年7月2日(金)	7月度 郷土史誌研究会
2021年7月14日(金)	大野地区出水調査
2021年8月6日(金)	8月度 郷土史誌研究会
2021年9月17日(金)	9月度 郷土史誌研究会
2021年10月1日(金)	10月度 郷土史誌研究会
2021年10月7日(木)	讃岐国分寺跡資料館での研修
2021年11月4日(木)	医療生協太田南支部主催ウォーキングへの協力
2021年11月5日(金)	11月度 郷土史誌研究会
2021年11月6日(土)	太田南の史跡と出水巡りウォーク
2021年11月16日(火)	太田中学校1年団 地域交流学習への協力 (太田南の史跡と出水巡りウォーク)
2021年12月3日(金)	12月度 郷土史誌研究会
2022年1月7日(金)	1月度 郷土史誌研究会
2022年2月4日(金)	2月度 郷土史誌研究会
2022年3月4日(金)	3月度 郷土史誌研究会

2. 年度計画

(1) 活動事業名

2021 年度 郷土史誌探訪事業

(2) 活動計画

2021 年度は 2020 年度に引き続き、太田南地区の歴史や民俗等を調査し、成果を地区の人々に広く伝える。今年度はコロナまん延防止重点期間によるコミュニティセンター閉鎖のため一部中止となった。

- 1) 地域に残っている写真や資料の収集、記録、保存 (通年)
- 2) 夏休みこども教室 (コミセン講座) (新型コロナウイルス対策まん延防止等重点措置のため中止)
- 3) 太田郷土史誌研究会メンバーの現地研修会
- 4) 太田南地区文化祭への出展 (新型コロナウイルスのため文化祭が中止)
- 5) 太田南の史跡と出水巡りウォーク開催
- 6) 「太田南の史誌」の編纂準備 (太田南の変遷を中心にビジュアルにまとめる)
- 7) 2021 年度 活動報告書作成

(3) 予算

高松市交付金	191,000 円
地元負担金	4,000 円
合 計	195,000 円

3. 高松ケーブルテレビ取材への協力

高松市の各地区を紹介する番組（コミネット TV）で、太田南地区の出水を中心に紹介した。令和3年3月3日（水）15時から、鹿ノ井出水、上免出水、庄助洞出水の3カ所で取材。太田郷土史誌研究会から、大住教夫、中澤健二、明石豊重、安藤みどり、三浦真里、古澤幸夫の6名が参加。放映は、令和3年4月いっぱい行われた。

（紹介の骨子）

①鹿ノ井出水をバックに

- ・江戸時代には33カ所、今も19カ所の出水を数える。当時の太田村の人口は数千人程度、現在の1/5。一面の田畑。その中で、最も大きい鹿ノ井出水、一年中絶えることなく水が湧き出ている、春の櫻、夏のアジサイ、秋の紅葉、一年を通じて住民の憩いの場。
- ・上免出水（次に訪問）やその他の出水と合わせ、太田南の人々の生活を支えてきた。雨が少ないこの地では出水の水が貴重であった。鹿ノ井出水には、平安時代に「白髪の老人がこの地で鹿となって掘り当てた」いわれや、「水を司る」水神さんが祀られている。

②上免出水をバックに

- ・2番目に大きい出水で、自然豊かな状態で残っている。昔はもっと水量が多く、子ども達はここで泳いだりして遊んだ。出水の水は「太田道池」に一旦溜め、その北側の田畑にも使われた。
- ・すぐ近くに「鑿井（さくい）の碑」があり、昭和14年の大干ばつを契機に出水の水を補うために井戸が掘られた。現在も当時のポンプが残されている。

③庄助洞出水をバックに、その他の出水を紹介

- ・近くに学問の神様「太田天満宮」もあり、昔は太田南の中心であった。中程度の出水が多く、庄助洞出水もその一つ、今は、ザリガニ釣りで有名。
- ・この東に、皿井出水がある。その横に皿井公園がある。その東にある合子出水（ごうしですい）には、河童伝説の昔ばなしがあり、地域の人に親しまれている。太田南には、出水だけでなく多くの神社・仏閣もあり歴史と自然に囲まれた住みよい街ですので、皆さん、一度遊びに来てください。



4. 讃岐国分寺跡資料館での研修

- (1) 日時 2021年10月7日(木)
- (2) 参加者 10人 ○準備物：帽子、飲み物など
- (3) 当日の日程

9:00 コミュニティセンター出発

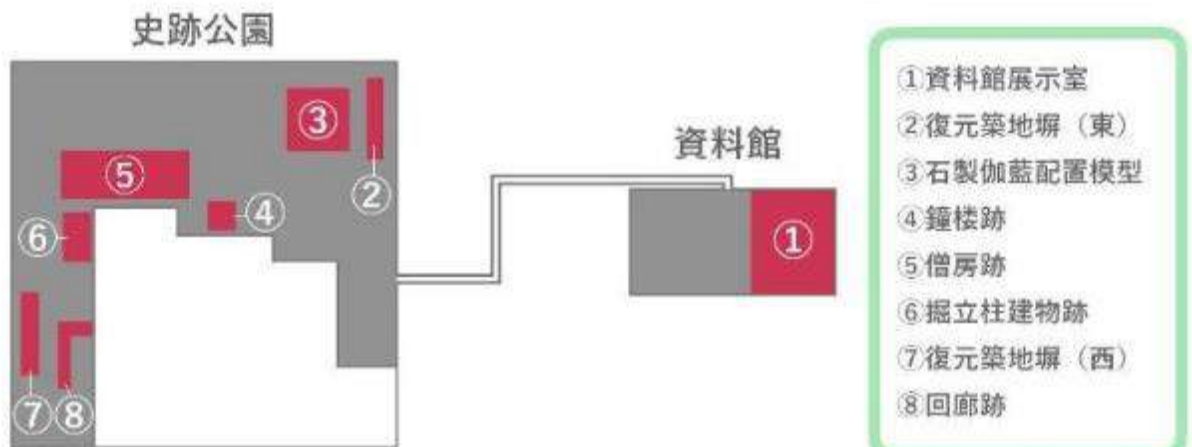
9:30 讃岐国分寺跡資料館到着

9:40 資料館の仁木さんの案内で研修開始

資料館の展示室見学

常設展示と併せて企画展「讃岐国府ヒストリア2—讃岐国府跡探求事業の調査結果—」も見学

讃岐国分寺跡のVTR視聴



(史跡公園へ移動)

10:20 特別史跡 讃岐国分寺跡を巡る。





金堂跡と塔跡の礎石も必見

11:10 資料館に戻り研修終了

この後、国分尼寺跡、法華寺へ廻り史跡を見学。発掘調査をしたところは草が生い茂っていて、礎石を見つけることが出来なかった。

12:00 コミュニティセンター帰着

当初の予定の9月22日がコロナ禍のため延期。10月とは思えない程の残暑のなか、汗をふきふきの研修となった。案内人の仁木さんの解説は穏やかで分かりやすく、国府と国分寺、国分尼寺の位置関係などよく理解できた。史跡公園めぐりも時間をゆったりととっていたため、質問もしながらの有意義な研修となった。国分寺跡には僧房跡や塔・金堂跡の礎石群など一級の史跡が揃っている。資料館と合わせてもっとたくさんの人が見学に訪れて欲しいところだ。沢山の資料とファイルを頂いて資料館を後にした。その後国分尼寺跡も見学。天平時代の国家のありかたに思いをはせながら帰路に就いた。

5. 太田郷土史誌研究会ホームページの立上げ

太田郷土史誌研究会が活動した成果を、広く地域の皆さんに知っていただくツールとして、令和3年度から「太田郷土史誌研究会ホームページ」を立ち上げた。

令和3年度は、ホームページのフレームワークの作成と活動報告書、各種パンフレットを掲載した。

新型コロナウイルスの感染拡大もあり、人と人との接触を抑えながら活動をしていく必要がある。今後、ホームページを活用し、研究会としての活動内容や活動成果の情報発信や地域の皆様とのオンラインにおけるコミュニケーションを促進していきたいと考えている。太田南地区にある史跡の情報、研究会のイベント内容など定期的に発信していく予定である。

より伝わりやすいホームページにしていくために、「お問い合わせ」から皆様の忌憚のない意見も聞かせていただけると幸いである。

(ホームページの紹介)

- ・太田南地区の歴史や文化についてまとめた活動報告書を掲載。
- ・太田南地区の見どころをまとめたパンフレットの掲載。
- ・イベントなどの情報発信としてのブログの掲載。
- ・ホームページへのアクセス方法

1.URL : <https://ootahistory.jimdofree.com/>

2.「太田郷土史誌研究会」で検索



6. 2021年度「史跡と出水めぐり」ウォーク（医療生協殿との共同開催）

(1) 日 時

令和3年11月4日（木） 9：30 コミュニティセンター集合
受付（医療生協殿） 会長あいさつ
2班の班分け、コース説明後出発
～12：00 コミュニティセンター着後解散

(2) テーマ

史跡と「太田南昔ばなし」の地を回ろう

(3) 参加者

15名 郷土誌史研究会メンバー 7名

(4) ウォーキングコース

- ① 太田競馬場跡 ⇒（遊歩道）⇒②廣田八幡神社 ⇒（参道）⇒③常夜灯と道標 ⇒
○帰ってきた若宮さん○おたの参り○ゴンタは祭りが大好き
④光臨寺 ⇒ ⑤西法寺とお成り門 ⇒ ⑥孝子甚兵衛の墓 ⇒⑦太田大根 ⇒
○村の大事を救ったたぬきのゴンタ
⑧熊野権現 ⇒ ⑨鹿ノ井出水（トイレ） ⇒ ⑩合子出水 ⇒
○鹿ノ井熊野権現 ○鹿ノ井川の大なまず ○鹿ノ井伝説 ○合子のかっぱ
⑪牽牛屋敷・西法寺旧址 ⇒ ⑫皿井新出水（皿井公園トイレ）⇒ ⑬庄助洞出水⇒
○牽牛屋敷
⑭ 香河小学校があったあたり ⇒ コミュニティセンター（解散）

(5) 配布資料等

- ① ウォーキング計画概要（本資料） ② 太田南探訪MAP
③ 鹿ノ井出水パンフレット ④ 太田南の昔ばなし
⑤ 記念バッジ



7. 2021年度「史跡と出水めぐり」ウォーク

(1) 日 時

令和3年11月6日(土) 9:30 コミュニティセンター集合
受付、会長あいさつ、コース説明後出発
～12:00 コミュニティセンター着後解散

(2) テーマ

史跡と「太田南昔ばなし」の地を回ろう

(3) 参加者

11名 郷土誌史研究会メンバー 8名

(4) ウォーキングコース

- ① 太田競馬場跡 ⇒ (遊歩道) ⇒ ② 廣田八幡神社 ⇒
○帰ってきた若宮さん ○おたの参り ○ゴンタは祭りが大好き
③ 上免出水と鑿井の碑 ⇒ ④ 光臨寺 ⇒ ⑤ 西法寺とお成り門 ⇒
○村の大事を救ったたぬきのゴンタ
⑥ 孝子甚兵衛の墓 ⇒ ⑦ 太田大根 ⇒ ⑧ 熊野権現 ⇒
○鹿ノ井熊野権現
⑨ 鹿ノ井出水(トイレ) ⇒ ⑩ 合子出水 ⇒
○鹿ノ井川の大なまず ○鹿ノ井伝説 ○合子のかっぱ
⑪ 牽牛屋敷・西法寺旧址 ⇒ ⑫ 皿井出水(皿井公園トイレ) ⇒ ⑬ 庄助洞出水 ⇒
○牽牛屋敷
⑬ 香河小学校があったあたり ⇒ コミュニティセンター(解散)

4. 配布資料等

- (1) ウォーキング計画概要(本資料)
- (2) 太田南探訪MAP
- (3) 太田南の昔ばなし(抜粋)
- (4) 記念バッジ

(熊野権現)



(鹿ノ井出水)



8. 太田中学校地域学習（郷土の歴史コース）への協力

(1) 日 時

令和3年11月16日（木）

8:30～9:00 太田中学校2F会議室集合→教室へ移動

9:00 ウォーキングコース等説明、説明後、全30人を3班に班編成・出発
～12:00 中学校に帰着（後日、生徒の皆さん全員から感想文と感謝の言葉をいただいた。）

(2) テーマ

太田南の史跡と出水を知ろう

(3) 参加者

30名 郷土誌史研究会メンバー 6名

(4) ウォーキングコース

太田中学校 → ①太田天満宮・太田城跡（発掘調査写真） → ②前田家の長屋門
→ ③若宮御神体出土地 → ④廣田八幡神社 → ⑤上免出水 → ⑥光臨寺 →
⑦西法寺のお成り門 → ⑧孝子甚兵衛の墓（太田だいこん） → 皿井公園（トイレ）
⑨皿井出水 → ⑩庄助洞出水 → 太田中学校

(4) 配布資料等

- ① ウォーキング計画概要（本資料）・・・事前配布（当日修正版配布）
- ② 太田南探訪MAP ・・・事前配布
- ③ 出水ガイドブックより抜粋 ・・・事前配布
- ④ 鹿ノ井出水パンフレット ・・・当日配布
- ⑤ 質問&回答 ・・・当日配布
- ⑥ 記念バッジ ・・・当日配布



(事前質問と回答)

Q 1. 太田地域とタヌキのつながりありますか

A 1. 「太田」という地名からも分かるように昔は一面に田が広がり自然豊かな地で雑木林や草の生い茂った場所も多く、タヌキにとっては棲みやすい環境で数多くのタヌキが生息していました。昔から太田の人々にとって親しみのあったタヌキは昔話にも登場し、タヌキ伝説につながる墓や祠も存在しています。

また、今では太田南地区は「たぬきの里」として紹介され、地域のキャラクターのタヌキのゴンタくんも活躍中です。「太田南たぬきばやし」という歌も作られ振付もあり地域行事等で披露されています。

現在も太田南地区はタヌキにとって居心地がいいのか、時々見ることがあります。

Q 2. 太田地域ならではの名物や訪れたい場所は？

A 2. 昔、太田地域は豊かな田園地帯で、出水が生活の支えでしたが、今は憩いの場所になっています。また、江戸時代からの交通の要所で、神社やお寺も人々に親しまれています。ここでは、鹿ノ井出水と廣田八幡神社を紹介します。

① 鹿ノ井出水

太田地区の数ある出水の中で、最も大きくどんな早ばつでも枯れたことがないという。鹿ノ井出水は 溝状に深く掘られ、一年中絶えることなく沸き、下流の伏石・太田・多肥を含む 合わせて百町歩以上の田を、潤してきました。

1998 年度魅力ある農村づくり事業の一環で、176mの区間を石積み護岸して、歩道や休息所(東屋)が整備されました。春には沢山の方が、満開の桜と水辺の錦鯉を楽しみに訪れます。鹿ノ井出水にまつわる昔話も残されており、昔から人々に愛されていた事がうかがえます。

〔 保安 3 年(1122)の大干ばつの時、伏石の居石神社に現れた白髪の老人が、鹿と
なってこの地に到り、泉を掘り当てて人々を救ったという昔話も残っています。 〕

② 廣田八幡神社

かなり古くから有る神社で、平安時代には既に存在していたようです。江戸時代初期寛永 6 年(1629)に火災により社殿・古記・宝物など、すべてが焼失しました。

江戸時代の書物(讃岐名勝図絵)には、大字大田村全域(太田・松縄・伏石)の鎮守であったと書かれています。

江戸時代まで(神仏混淆時代)は、石清尾八幡宮の供奉僧が祭祀を執り行っていました。明治維新以降は、櫻木氏が宮司を務めています。

御祭神は、応神天皇・神功皇后・玉依姫で、後に天照大神・仁徳天皇(若宮)等が祀られています。(櫻木宮司のお話では 20 以上の神様が祀られている)

なお、若宮(仁徳天皇)は、主祭神(応神天皇)の御子である。

神社に入る時に通る大きな門「隨身門」は、神社の内外を分ける門で、左右に兵仗を帯びた警護役人の像が安置されています。

廣田八幡神社には、様々な形をした狛犬が、4対設置されています。次の質問で出てきます古澤才蔵も江戸時代末期に奉納しています。

その他、廣田八幡神社にまつわる昔話が残されていたり、鎮守の森には高松市指定の大楠もあり、スピリチュアルな雰囲気が漂う憩いの場所でもあります。

Q 3. 太田（高松）出身の歴史的人物はいますか？ また、太田地域に貢献した歴史上の人物はいますか？ その人達はどんなことをしましたか？

A 3. 太田地域からは歴史の教科書に載るような人は見当たりませんが、太田地域に貢献した身近な人の記録に残っています。ここでは、明治維新の頃に生きた2人の人物を紹介します。

① 古澤才蔵

江戸時代末期に生き明治8年に亡くなった古澤才蔵は、太田地区の大地主で、近くの出水の池浚えをしていて、戦国時代に廣田八幡神社から消失していた、若宮神社の御神体（神官の装束をした小さな像）を発見しました。

才蔵は若宮神社の再興に尽力し、無事にご祭神（仁徳天皇）を本殿にお祀りしました。

また慶応2年(1866)に廣田八幡神社境内に、一対の狛犬を奉獻しています。この年は才蔵の厄年であり、才蔵は幕末の騒然とした時代に、太田地区の安寧を願って狛犬を寄進したと思います。

② 太田仁卿(広三郎) 大正13年没 太田村の人

明治5年(1872)に学制が公布され、太田村他7カ村の子どもたちが通う香河小学校が設立され、太田地区にあるお寺「光臨寺」に置かれました。太田広三郎はこの地の名士で、当時寺子屋の師匠をしていたことから、小学校が太田地区に置かれたのではないかと思います。

香河小学校は、その数年後に光臨寺の少し北側に新しく校舎を建て移転しました。光臨寺には太田仁卿の墓があります。

皆さんは、下記の方々をご存知ですか。香川に関係を持った、あるいは、香川出身の有名な10名を選んでみました。太田地区と関係があるか調べてみて面白いことが分かれば教えて下さい。

○弘法大師(空海) 774-835	善通寺出身 宗教家真言宗 四国遍路
○菅原道真 845-903	京都出身 讃岐国司 城山での雨乞い
○西嶋八兵衛 1596-1680	浜松出身 満濃池改修 ため池・河川治水
○平賀源内 1728-1780	志度出身 本草学他 日本のダヴィンチ
○柴野栗山 1736-1807	牟礼出身 寛政改革 松平定信の補佐
○向山周慶 1746-1819	引田出身 三盆糖の開発 向良神社
○藤沢南岳 1842-1920	安原出身 幕末讃岐松平藩を勤王に 泊園書院(大坂)
○中野武英 1848-1918	高松出身 香川県独立の父 明治維新後の経済発展 渋沢 栄一に師事
○大久保謙之丞 1849-1891	財田出身 瀬戸内海に橋 四国新道構想
○菊池寛 1888-1948	高松出身 文芸春秋社長 作家 芥川賞・直木賞設立

Q 4. 太田地域の歴史的な建物がありますか？

A 4. ① 光臨寺の本堂

光臨寺が太田の現在地に移ってきたのは安永9年(1780)。現在の本堂は約200年前の文化7年(1810)に再建されたもので、太田地域で最も古い建造物です。入母屋造りで向拝のある堂々たる建物で、内部の彫刻も見事です。

② 前田家の長屋門

長屋門とは江戸時代の武家屋敷などで、長屋の一部に門を開いたもの。門の両側部分に門番の部屋や仲間部屋などが置かれました。農村では名字帯刀を許された豪農や庄屋などでも、長屋門を作ることが許されました。

前田家の長屋門は、江戸時代の豪農野崎家の屋敷であったのを明治時代に前田家が譲り受けたものです。幾度か修理を行い元のままなのは大門の脇の潜り戸だけのようです。潜り戸の内側の分銅(鍵)に、嘉永7年(1854)の刻印があり、170年ほど前に門が作られたことが分かります。

Q 5. 太田地域の歴史、昔話などがありますか

A 5. 弥生時代、古墳時代、古代、中世に至る集落遺跡も見つかっており、その時代から様々な歴史が刻まれています。地域の歴史は史跡や出水、神社や寺院など古くから残されているものを調べることによって知ることができます。

昔話は現在3冊の本にまとめたものがあり、約40話が収録されています。

これは地域在住の藤村雅範さんが幼い頃に父親から聞かされた昔話が忘れられず、長い間に取材し物語化したお話をもとに編集したものです。

Q 6. なぜ太田には出水が多く存在するのですか？ また、大きい川がないのに出水(水)が出る理由は何ですか？

A 6. 太田地区には大きな川が流れていないので、水田や生活に必要な水を出水や井戸から得ていました。特に水田には出水の水が必要でした。この出水の水は、太田地区の地下にある豊富な水が湧き出もので、その由来は、少し難しくなりますが、次の通りです。

阿讃山地から流れ出た香東川によって、現在の高松空港の北あたりから北東方向に扇状地が作られています。この扇状地の下に香東川からしみ込んだ地下水が流れています。その地下水の水面の高さが高くなってくると、地表のくぼんだ所から、湧き出てきます。

扇状地の始まりに近いところは地下水面が深いところにあるので、地下水が湧き出るとは稀ですが、太田地区のように扇状地の縁のあたりでは、地下水面が地表に近づいてきますので、水が湧き出しやすくなっています。

太田地区に人が多く住むようになり水田がすくなくなることと、戦後の内場ダムの建設や、吉野川の水を香川県に引き入れる「香川用水」が整備され水田に豊富に水が供給されるようになったことから、出水がなくても水に困らなくなり、出水の数が少なくなってきました。

Q 8. 太田校区に古墳などはありますか？

また、いつ頃から人々が生活を始めたのですか？

A 8. 校区に古墳はありません。が、積石塚で有名な岩瀬尾山古墳群を築いた人々の村が校区の北部あたり（上天神遺跡～太田下・須川遺跡）にあったのではないかと、ともいわれています。

（いつ頃から人々が生活を始めたのですか？）

少なくとも、約2000年前には人々が生活していたことが分かっています。

① 太田原高州遺跡

ここは弥生時代中期の終わりごろから後期の初め（約2000年前）にかけての集落遺跡で、直線的な溝で区切られた「方形周溝墓」が複数見つかっています。その内の一つの埋葬施設からは、水晶製の小玉が7点出土しています。この水晶玉は100km以上離れた京都府や鳥取県あたりの日本海側で作られたものです。

② 太田下・須川遺跡

太田原高州遺跡より少し後の弥生時代後期の大規模な集落跡が見つかっています。高松平野を代表する拠点集落が上天神遺跡から太田下・須川遺跡あたりにあったようです。ここからはたくさんの弥生土器や、井戸跡から祭りに使われた高坏・器台・壺などが大量に見つかっています。また昨年度の発掘調査では、直径9.1mもある大型のたて穴建物も見つかりました。何に使用したのでしょうか？

Q 9. なぜ太田池を作ったのですか？どんな人々の願いがあったのですか？

A 9. 太田池は、古い地図や文献によると江戸時代前期には造られていました。上流の上

免出水の水をいったん太田池に貯めて、下流の水田に使用していました。昔は頻繁に渇水になっていましたので、水を安定して供給して欲しいとの農家の願いが込められています。

また、昔は北側から西側の土手一面に桜並木があり、地区の運動会などが行われていたそうで、人々の憩いの場でもありました。

現在も年に2回、100名近い人が参加して土手の草刈りなどの清掃をしたり、南側の土手にアジサイを植えたりして、大切に管理されています。

Q10. 昔と今で大きく変わったところ（自然や暮らし）や受け継がれてきているところはありませんか？

A10. 太田は古くから開けた肥沃な土地で、豊かな田園風景が広がっていましたが、大正15年に太田駅ができ、昭和26年に四国電力が駅前に社宅団地を造ってから、駅を起点とした新興住宅地帯として発展してきました。駅前の通り（旧県道147号太田上町志度線）沿いには、金融機関や量販店なども出店して賑わっていました。

しかしながら、近年では、サンフラワー通りなど新しい道路が整備されるとその沿線は商用地となり、賑わいの中心が変化してきています。また、その周辺は住宅地として開発が進んでいます。

町の姿は変わってきていますが、神社の祭りや地蔵会等の伝統行事は昔から受け継がれていて、氏子や保存会の人を中心にあって今も大切に守られています。

Q11. いつ頃から今のような町になったのですか？

A11. 平成5年（1993）に国道11号バイパスの暫定供用、平成10年（1998）のレインボー通りの開通、平成13年（2001）のサンフラワー通りの開通以降、店舗、住宅、マンションが立ち並び、今のような風景になってきました。

そして現在も変化を続けています。

Q12. 太田校区には古くからある塩江街道の他、東バイパス、サンフラワー通り、レインボー通りなど主要な道があります。ごく最近では、ことでん伏石駅の営業が始まりました。

これから、どんな風に太田の町は変わっていくと思いますか。地域に暮らす人が期待することなどについて教えてください。

A12. 太田地区は交通の要衝として、また、市街地に隣接した住宅地として発展してきました。その反面、地域住民の高齢化と若い世代の都会への転出に伴う問題が、顕在化してきました。

これからは、“便利さ重視のまちづくり”のみでなく、住民にとって安全に安心して楽しく、住み続けられる“住民目線重視のまちづくり”を目指します。

- あらゆる世代の住民が集える行事（お祭り・地域一斉清掃等）の継続
- 災害弱者に配慮した避難対策の充実
- 高齢者の生活支援サービスの充実
- 交通環境の改善、整備（狭隘な生活道の拡幅、交通規制の見直し等）
- 街区公園の整備（南部地区他）

9. 太田南小学校地域学習への協力（大住教夫）

(1) 日時 令和3年11月24日（水） 第2時限

(2) 参加者 太田南小学校3年生
各クラス代表者2名と対面で、他の生徒はリモートで参加。

(3) 事前の質問（先生より）

児童はやはり出水のことが気になるようです。出水を保全するためにどんな活動をしているのかなど、大住さんが地域の活動にどんな思いで取り組まれておられるかも含めてお話しいただけるとありがたいです。

〈昔の町の様子〉

- ・昔の太田南の町の様子を知りたい。
- ・太田まんじゅうや太田だいこんの歴史を知りたい。
～人々の活動・思いについて～
- ・大住さんはどうして太田南の歴史を研究しようと思ったのですか。
- ・「太田南の民話」は、なぜ作ったのですか。どんな思いをこめたのですか。

〈出水について〉

- ・昔の出水の様子を知りたい。今の様子と違っていたところはどこですか。
- ・太田南の出水は全部でいくつありますか。数が増えたり減ったりしているのですか。
～人々の活動・思いについて～
- ・大住さんが好きな出水はどこですか。
- ・なぜ鹿の井出水に桜を植えたのですか。
- ・桜祭りを始めたのはどうしてですか。
- ・鹿の井出水には、季節によってほかにどんな飾りを飾っているのですか。
- ・地域の人で、出水を守るためにどのような活動をしているのですか。
- ・活動している中で、大変なことと楽しいことはなんですか。

〈廣田八幡神社〉

- ・だれを祭っているのですか。
- ・どんな気持ちで秋祭りを運営しているのですか。

〈その他〉

- ・どんなボランティアをしてくれているのですか。
- ・なぜここまで、地域の活動にかかわってくれているのですか。



10. 現地説明板の一部撤去と補修

高松市の夢づくり事業の一環として平成27年（2015）に設置した現地説明板は、設置状況を定期的（3年毎）に点検して高松市に届け出ることになっている。今年度で6年が経過することから2回目の総点検を実施し、2022.1.26 一部撤去と補修を実施した後、高松市に届け出た。

1. 現地説明板の撤去

「平家落人の塚」は農地の中にあり、現地説明板をその近くに設置したことから、散歩をされている方が無断で田畑に入ることがあり、所有者の方にご迷惑をおかけしていた。このため、この史跡の現地説明板を撤去した。



⇒



コミュニティセンターに移設



2. 現地説明板の補修

「常夜灯と道標」の現地説明板は立地スペースの点から垂直ではなく斜めに設置した。そのため、紫外線の影響を受けやすく、他の現地説明板に比べて色が褪せてしまった。今回、一斉点検の機会に、説明を記載している板の張替えを実施した。それにあわせて記載内容を一部変更した。



⇒



11. 「太田南の昔ばなし」第1集の増刷

2021.12時点で、第1集数冊、第2集185冊、第3集225冊が残っており、第1集の増刷が必要になった。増刷は、3冊を一度に購入される方が多いことから、第2集の残っている数と同数の185冊とした。

増刷はタムラ印刷に依頼し、1月末納入。費用81,400円（税込み）であった。

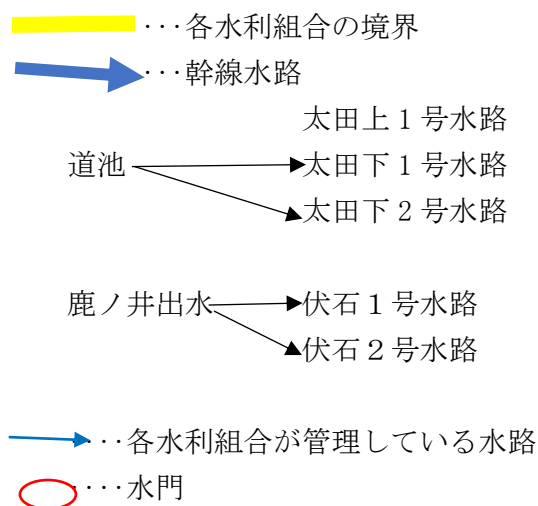
第Ⅱ編 調査研究編

1. 資料収集

(1) 「太田南地区の水利図」～高松市太田土地改良区管内図～

「太田南地区の水利図(2021年)」は、太田土地改良区(注1)内の各水利組合が行った管内の水路や水門などの現況調査の結果を高松市太田土地改良区管内図にまとめたものである。

<索引>



太田南地区の水利組合		
1	松の内水利組合	10 皿井
2	大田原	11 皿井東股
3	上免	12 借屋敷
4	道池	13 払井
5	川井	14 下々所
6	長池	
7	合子	
8	新出水	
9	馬淵	

*鹿ノ井出水の北辺は鹿ノ井出水の水掛なので伏石水利組合に入る

太田南地区の大きな特色は水利組合の多さで、14もの水利組合に分かれている。伏石は伏石水利組合と野田池かやり水利組合の2つ、松縄・今里・上福岡はそれぞれ一つの水利組合であるのと対照的である。その理由は、太田南地区がその水掛りの出水ごとに配水の組を作っていたことに由来する。

太田南地区も宅地化の進行につれ農地が激減し、水路の維持管理にも苦勞する状況になっている。「水利図」で青色に塗られているのは各水利組合が現在管理している水路のみで、水利組合の管理から外れて維持管理されず放棄されつつある水路も多いと考えられる。また、馬淵水利組合と松の内水利組合は宅地化に伴って活動を停止しているようだ。

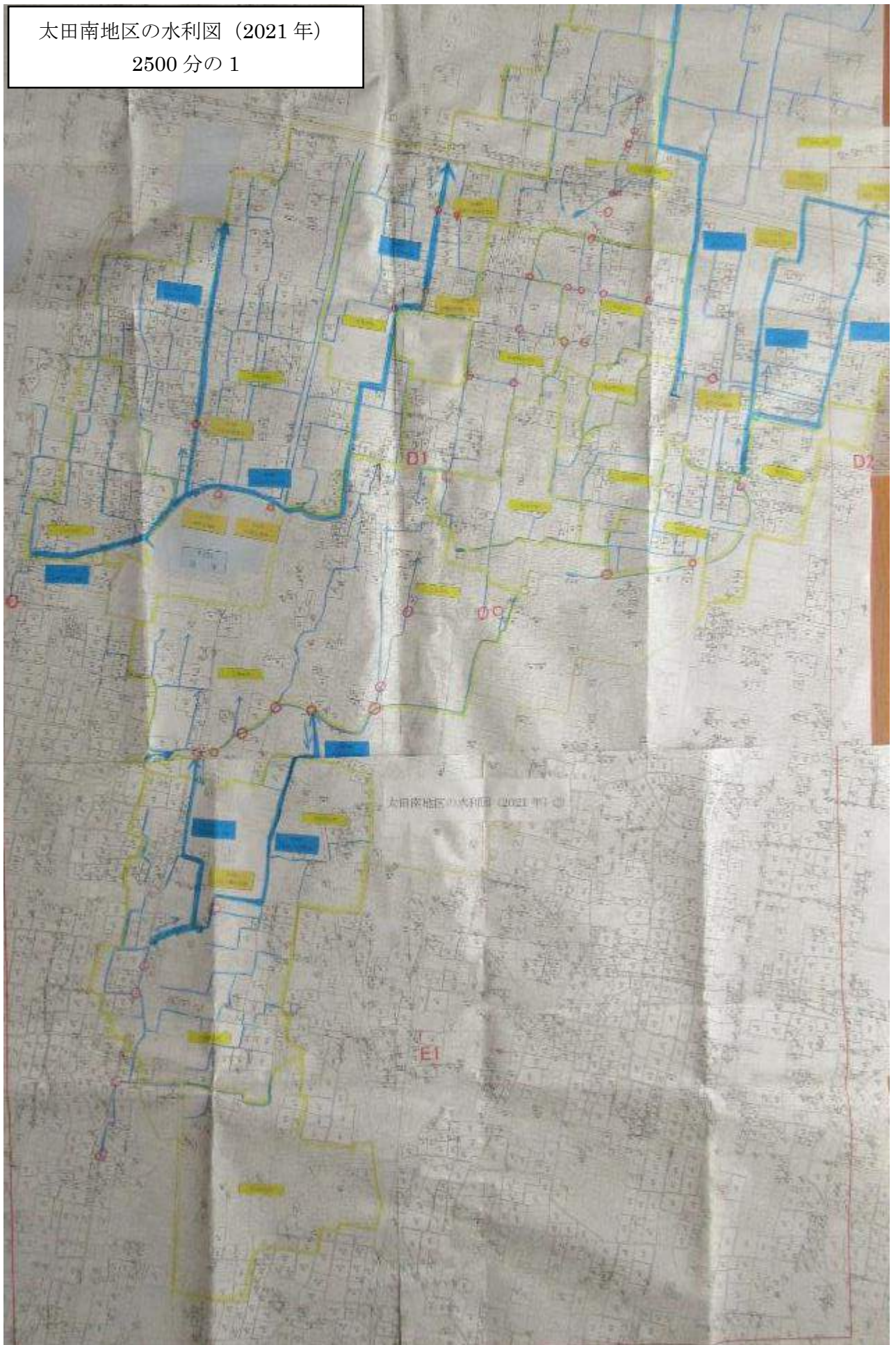
借屋敷水利組合は、借屋敷出水が廃棄された後も同じ範囲の農家で水利組合を維持している。

上免水利組合は皿井までの広い範囲をカバーしている。かつては上免出水の湧水が道池に蓄えられ道池より北の農地をうるおし(道池水利組合の範囲)、さらに茶園や皿井の田に水を供給していたのである。いかに上免出水の湧水が豊かであったかがよく分かる。

鹿ノ井出水の湧水は伏石1号水路や2号水路によって伏石の田へと導かれるが、太田の人たちは新たに新出水をつくり、水を確保している。(新出水水利組合)

(注1) この場合の「太田」とは、高松市に合併する前の太田村の範囲で、太田・伏石・松縄・今里・上福岡の全域である。

太田南地区の水利図（2021年）
2500分の1



主な水門

<道池水利組合>

道池水門



太田下1号水路 太田下道池北水門



<皿井水利組合>

太田下2号水路

太田中学校北水門1



太田中学校北水門2



<大田原水利組合>

太田上1号水路



2. 調査研究

(1) 大野・一宮地区の出水調査

古澤幸夫

1. 調査に至る経緯

太田郷土史誌研究会では、2018年度に太田南地区の出水を1年かけて調査した。今回、2018年度の調査でお世話になった新見香川大学名誉教授のご指導により、太田南地区の上流（地下水の流れ）に当たる大野・一宮地区の典型的な出水を調査することができた。

香東川に端を発する地下水が、上流と下流でどのような形で出水としてくみ出されていたのか比較することにより、太田南地区の出水についてより深く知る機会となった。

2. 調査日時

2021年7月14日（水）9時（琴電一宮駅集合）～12時30分（琴電一宮駅解散）

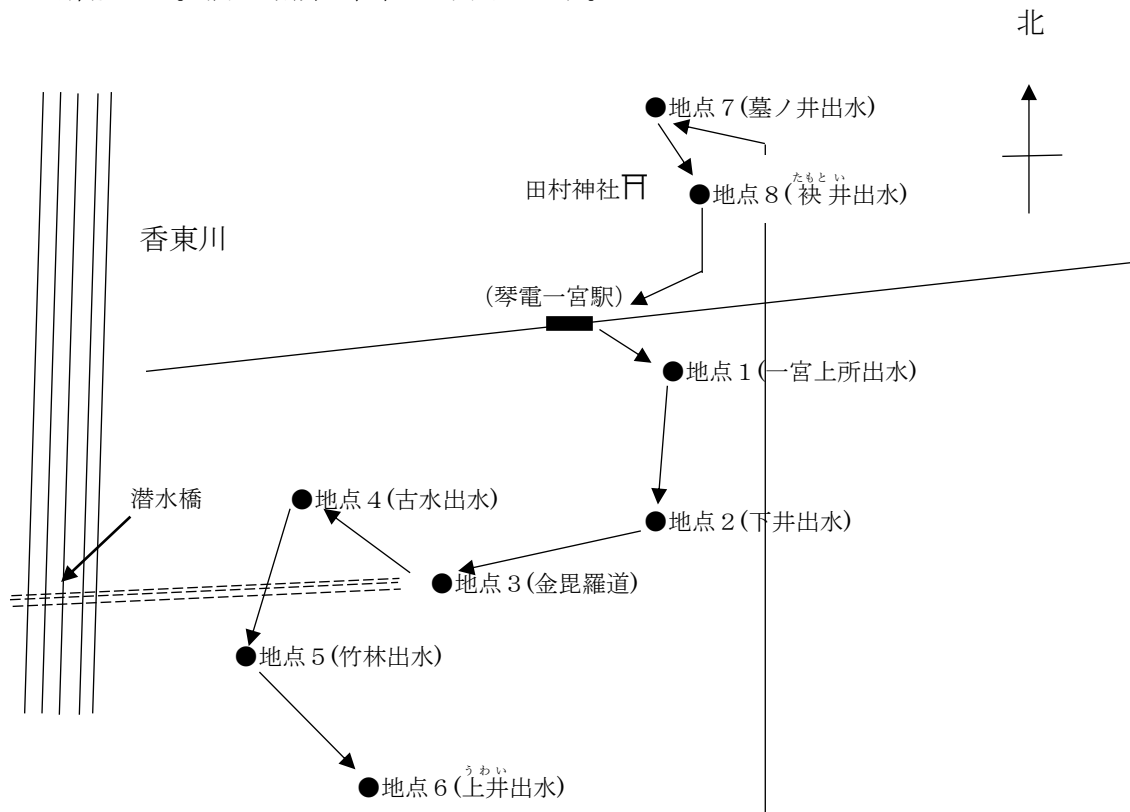
3. 参加者

新見香川大学名誉教授

大住、中澤、明石、安藤、三浦、山下、古澤（郷土史誌研究会）

4. 調査ルート

琴電一宮駅に集合し、新見先生の案内で以下のルートで調査し、最終琴電一宮駅で解散した。調査場所の位置を下図に示す。



5. 調査結果

地点1 「一宮上所出水」

(2021.7.14) 夏



(2021.7.14) 夏



(2022.1.31) 冬



(2022.1.31) 冬



(2022.1.31) 冬



地点2 「下井出水」

(2021.7.14) 夏



(2021.7.14) 夏



(2021.7.14) 夏



(2022.1.31) 冬



(2022.1.31) 冬



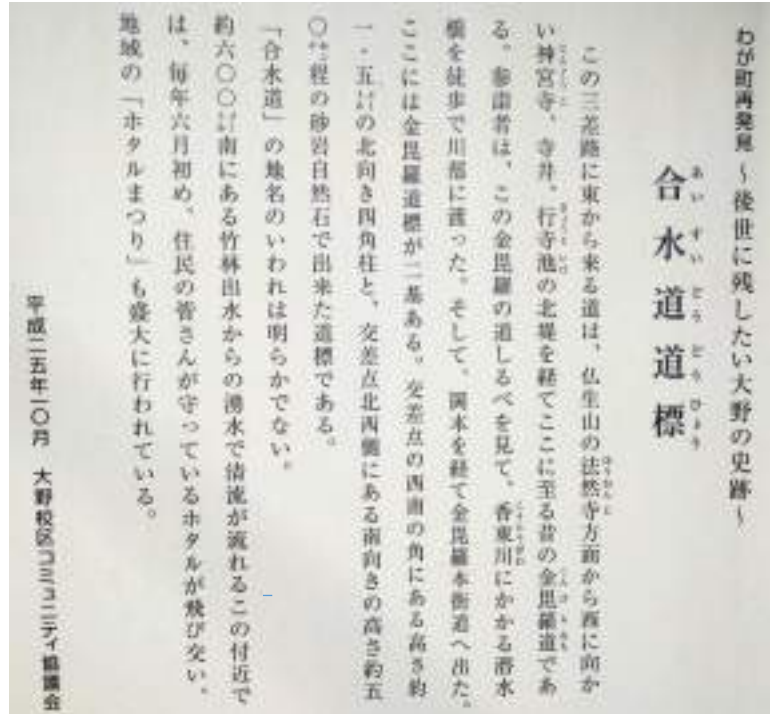
(2022.1.31) 冬



地点3「金毘羅道」

下井出水から西に少し行くと3差路に出る。ここにお地藏さんのようなものがありその前に藤の木があり、夏には一休み出来る。3差路から真っすぐ西に行き香東川に突き当たるところに潜水橋がある。現在は通行止めであるが、夏に川の水が流れているにも関わらずオートバイが渡っていった。

(2021.7.14) 夏



(2022.1.31) 冬



(2022.1.31) 冬



(2022.1.31) 冬



(2021.7.14) 夏



(2022.2.2) 冬



「金毘羅道横の水路（竹林出水から続く）」

金毘羅道が香東川に突き当たる交差点には、竹林出水からの水路が南北に通っている。夏は草で覆われ、蛍も舞うとのこと。水量は夏に多いが、冬に涸れる風ではない。太田南地区の南、中央の出水は、夏水量が多く冬は涸れ、大きく異なっている。

(2021.7.14) 夏



金毘羅道

この現象は、この辺りの地下水位の位置、季節による水位の変動が太田南地区と異なることが要因と推定される。つまり、ここでは出水の水は香東川の伏流水によることから、地下水面が地表よりかなり深く、また水面の変動が少ないと思われる。一方、太田南地区では、地下水位が地表から浅いところにあることから、深く掘らなくても出水が出る一方、湧水期に地下水位が下がると、すぐに出水が涸れると考えられる。

(2021.7.14) 夏



(2021.7.14) 夏



(2022.1.31) 冬



(2022.1.31) 冬



地点4「古水出水」

(2021.7.14) 夏



(2021.7.14) 夏



(2021.7.14) 夏



古水出水も夏と冬の様相は、夏に水量が少し多い程度
であり変わらない。

夏には見られなかった鯉が泳いでいた。冬でも涸れない
ことであろう。

(2022.1.31) 冬



(2022.1.31) 冬



(2022.1.31) 冬



地点5「竹林出水」

竹林出水は、夏は樹木に覆われて良く見えないが、冬には出水とその水路が良く見える。竹林出水から金毘羅道までの約1 Km の水路は、水仙の花などいい散策コースである。

水源地で湧出する水量は多くはないが、水路の途中からの湧水が合わさり水量が増しており、太田南地区の鹿ノ井出水に似ている。

(2021.7.14) 夏



(水源地近くの水路で調査)

(2021.7.14) 夏



(水源地)

(2022.2.2) 冬



(水源地)

(2022.2.2) 冬



(北に向かう水路)

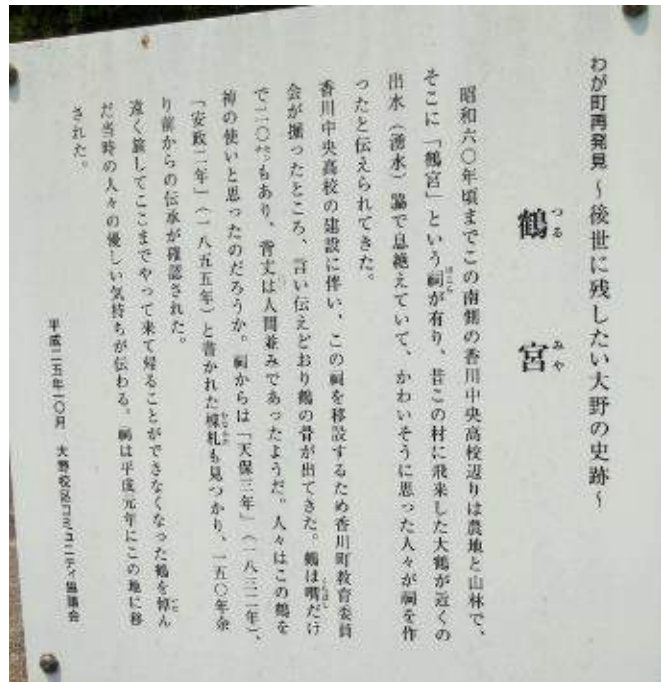
(2022.2.2) 冬



(水路横に水仙の花)

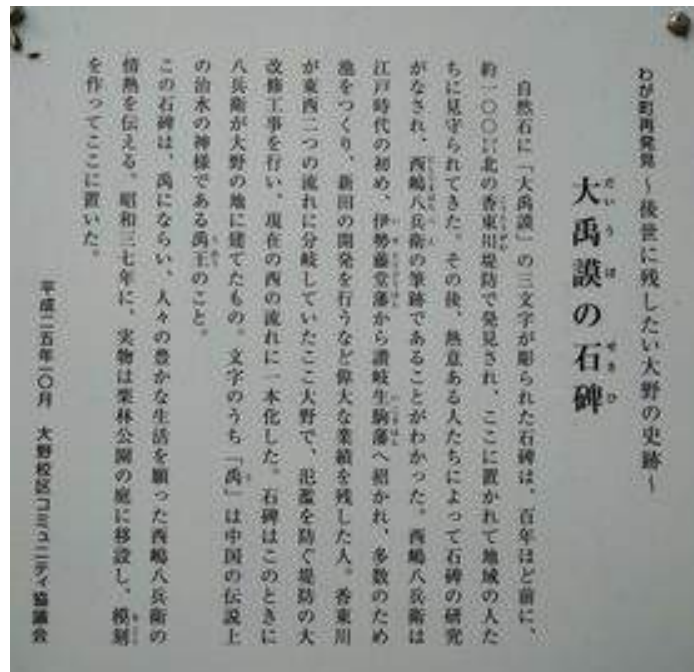
竹林出水近くの「鶴宮」

(2021.7.14) 夏



竹林出水近くの「大禹膜」

(2021.7.14) 夏



(2022.2.22) 冬



地点6「上井出水」

(2021.7.14) 夏



(2021.7.14) 夏



(2021.7.14) 夏



わが町再発見 ―後世に残したい大野の史跡―

「出水」は方言で、水の湧き出るところのこと。出水は古くから農業用水であるとともに、洗濯など生活用水にも利用され、地域の大きな憩いの場でもあった。香東川沿いでは川の伏流水が湧きだす出水がいくつもある。

上井出水から湧き出した水は、行幸池の西側を遡り北に流れ、流域の田畑を潤してきた。この出水の位置は、江戸時代の初めに西嶋八兵衛によって堰き止められる前の香東川の東の河筋にあたると思われる。昔のままの石垣で囲まれ楯に竹林がある姿から、平成二三年から二四年にかけて行った改修工事により現在のようになり整備された。時代の変化とともに形は変わっても、これからも変わることなく出水は貴重な水資源であり、また大野の大事な自然景観である。

平成二五年一〇月 大野町区コミュニティ協議会

下口の 上井出水

(2022.2.2) 冬



(2022.2.2) 冬



(2022.2.2) 冬



地点7 「墓の井出水」

(2021.7.14) 夏



(道路の南側に水源)

(2022.2.2) 冬



(2022.2.2) 冬



(水源地を南から望む)

(2021.7.14) 夏



(道路の下を北側の水路に)

(2022.2.2) 冬



(2021.7.14) 夏



(北側の水路を北に望む)

(2022.2.2) 冬



墓の井出水の南側で少し離れて墓地があった。
この墓地の近くの出水なので「墓の井出水」と名付けられたのかもしれない。近くの人に聞いてみたが、よくわからないとのことであった。

(2022.2.2) 冬



遠くに墓地が見える

(水源地から南の方向)

地点8「田村神社横の出水（袂井出水）」

田村神社の東側にある出水で、太田南地区によく見られる池状の出水であるが、冬に涸れないところが違っている。大野・一宮地区の出水に共通して地下水位の季節による変動が少ない状況が、池状の出水でも見られるケースであった。

(2021.7.14) 夏



(2021.7.14) 夏



(袂井出水より北の水路を望む)

(2022.2.2) 冬



(2022.2.2) 冬



6. 出水調査を終えて

2018年～2019年に、扇状地の扇央から扇端にあたる太田南地区の出水を調査した。今回、旧香東川の河川跡に位置し、より上流の大野・一宮地区の出水を観察することで、太田南地区の出水についてより深く知ることが出来た。

この地区の出水は深い位置に掘られていることが、太田南地区の出水と大きく違っていた。例外(?)的に、田村神社東側にある「袂井出水」のみが池状の浅い出水であった。

また、水量はそれほど多くなく、季節によって涸れる出水もなく、太田南地区の出水と様相を異にしていた。

今回、訪れることが出来なかったが、「大野石清水八幡神社」横に「内場池建設顕彰碑」がある。この碑に、水不足で苦しめられていた大野村を救いたいと奔走した佐野兼太郎らの活動が記録されている。(平成22年大野風土保存会議発行「大野風土記」より)

内場池の建設についても、佐野兼太郎らの努力によるものであり、いかに大野地区の水事情が厳しいものであったか窺い知れる。

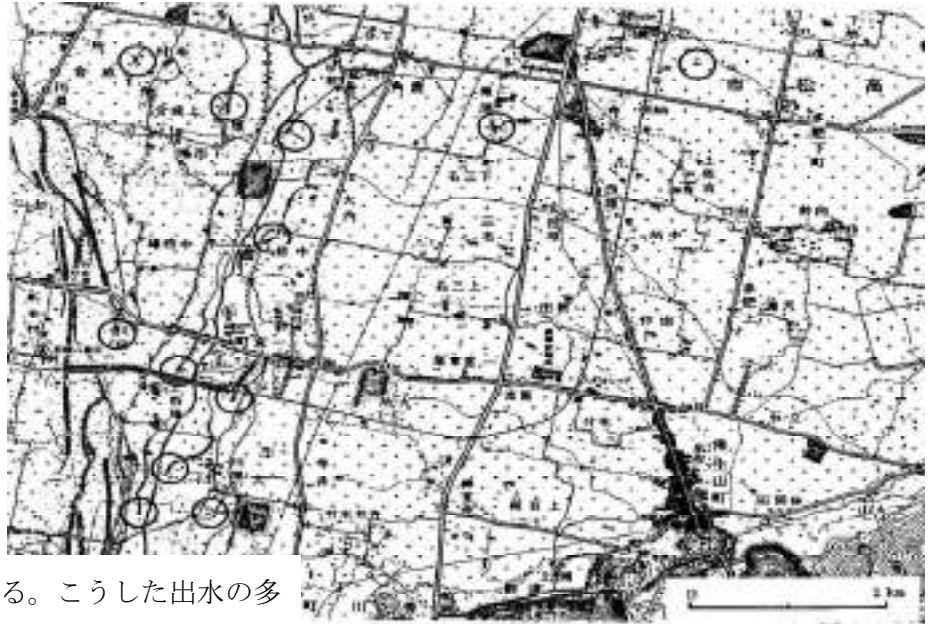
以上

出水灌漑システムの特徴と地域資産としての意味

讃岐平野は典型的な溜池主灌漑地域として知られているが、出水(すい、でみず)と呼ばれるこの地域独特の泉や井戸による地下水利用も活発である。旧版の 1:25,000 地形図「高松」図幅(1962年修正測量)には出水の存在が表されているが、出水の湧出部の位置を図中に○で示した。

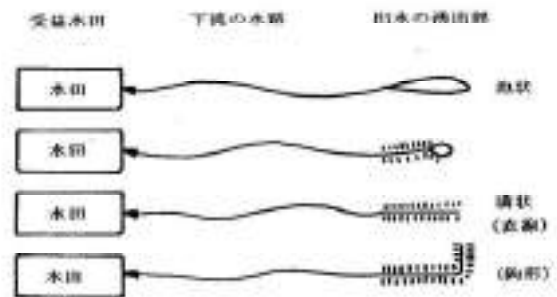
出水は不圧地下水を集水し下流の水田に送水する灌漑システムであるが、次のような形態的特徴を有している。

一般に、地下水位の深い扇頂や扇央の出水は深い溝状の湧出部(頭)を持ち、地下水位の浅い扇端の出水は浅い池状の湧出部



(壺、井坪)を有している。こうした出水の多くは自然の状態ではなく、小さな泉の周囲を掘り下げ、石垣や井桁で囲い、湧出部の崩壊や埋没を防ぐなどきわめて人工的な施設となっている。こうした出水の形態と機能は、イランのケイ(地下水集水明渠)に酷似している。また、乾燥地域のカナート(カレーズ)や鈴鹿平野・垂井盆地のマンボなど地下水の集水暗渠とも同一の集水・送水機能を有している。

(1) 出水の湧出部・水路と受益水田(平面図)



また、出水は限られた水資源を有効に再利用するシステムでもある。水田への灌漑水は浸透し地下水となるが、出水はこれを再び集水して下流の水田を灌漑している。讃岐平野において、出水の存在は地域の生態系と生活系をより豊かなものにしていく。

今回、太田郷土史誌研究会の高松平野南部の出水調査に案内者として参加する機会を得たので、1980～90年代に撮影した何枚かの写真を紹介しながら、訪れた一宮上所、下井、竹林、上井、墓の井、袂井の各出水について往時の姿を振り返ることにした。

地点1 「一宮上所出水」

一宮上所出水は、一宮駅東の踏切そばにある水面までの深さ約 4m の溝状の湧出部をもった出水で、非灌漑期にも少量の湧出がある不断泉である。この出水は海拔高度 40m 付近に位置し、一宮駅に近いために度々訪れる機会があり出水が変貌する様子を知ることができた。かつては丸石積みの湧出部や水路で木々も繁茂していたが、水路壁の崩壊や家庭排水の流入もみられた。2010 年頃に改修され、現在のようなコンクリート造りの施設になった。地元の一宮小学校では 1990 年頃から出水を地域学習素材として取り上げており、出水の保全を呼びかける子ども手作りの立て札がみられた。



一宮上所出水の湧出部の変貌 (1998 年 7 月、2004 年 11 月、2009 年 7 月撮影)

地点2 「下井出水」

下井出水は、一宮駅の南 1km の水田地帯にあり、田面から出水の水面までの深さ 3 ~ 4m の池状の湧出部をもち、非灌漑期にも少量の湧出がある不断泉であった。この辺りから扇端部にかけては、池状の出水が一般的になっていく。1980 年代には壊れた三輪車が放置されるなど管理状態はよくなかったが、1998 年調査時にはベンチが置かれるなど憩いの水辺として整備されていた。しかし、その後出水の周りに住む人も少なくなり、親水性は感じられなくなった。



下井出水の湧出部と調査する地理ゼミ生 (1998 年 7 月撮影)

地点5 「竹林出水」

竹林出水は、川部橋下流 300m の香東川東側堤防に沿いの林の中にあり目立たない存在である。海拔高度は約 55m で、出水湧出部は堤防より約 6m 低く、円礫を積んだ石垣は幅

4m、高さ 2m であった。出水の湧出量は、香東川の流量変動に敏感に反応し年間を通して湧出が多い不断泉である。1980 年代の灌漑期には 30 ～ 40 ㍓/秒、非灌漑期に 5 ～ 20 ㍓/秒と高松平野の出水では大規模なものの一つであった。



2000 年頃からホタルを育て、説明板を設置するなど、出水を地域のシンボル（歴史的資産）として捉えるような取り組みがされている。



石積みの竹林出水の湧出部と下流に延びる水路の様子（1998 年 12 月撮影）

地点6 「上井出水」

上井（うわい）出水は川部橋の東 300m に位置し、行寺池・辻堂池、内場用水、香川用水等をあわせて、高松市寺井町・一宮町・三名町・鹿角町の水田 135ha を灌漑する。1980 年代から観察調査を継続しているが、現在も年間を通して湧出する不断泉である。出水の湧出部は周囲の土地よりも約 4m 低く、円礫を丁寧に積み上げて石垣（幅 4m、高さ 1m）が造られ、小さな池状の湧出部から下流に延びる水路沿いの各所には階段を持つ洗い場が設けられていた。

近くの民家では長らく井戸水と出水を生活に利用し、出水は洗濯、野菜・農具の泥落としのほか、飲食・米・食器洗い、風呂に約 30 軒が利用したという。1960 年代後半になると住宅地化と排水による水汚染が進み、1975 年頃の上水道普及を契機に生活用水・地域用水としての出水の存在は薄くなった。とはいえ、1980 年代には調査で訪れると野菜洗いや洗濯物の濯ぎにやってくる人たちや、ザリガニ釣りや水遊びをする子どもたちにも出会うことも多かった。



1984年7月の豪雨で西側の石垣が崩壊し、コンクリート壁となったが、湧出部は円礫を積み重ねた石垣のままで落ち着きある地域資産と感じられた。その後大雨で出水湧出部は大きく崩れ、出水の改修工事が行われて現在のようなコンクリート壁で囲まれた人工的施設となった。現在でも湧出部の南東隅から年間を通して湧出しているようだが、管理のため柵と扉が設置され立ち入ることはせず、親水性は失われた。



上井出水の湧出部（1984年6月撮影）と下流に延びる水路（1983年10月撮影）

大雨時には左側の水路から出水に流入があり、湧出部は堰上げられる。洗濯物の濯ぎや野菜洗いに来る人も多く、洗濯カゴが置かれ石垣にはタワシやブラシが挟み込んであった。



1984年7月豪雨で崩れた石垣復旧（1984年11月撮影）とその後の出水（1998年12月撮影）

地点7「墓の井出水」

墓の井出水は一宮駅北方、一宮小学校・中学校の東側に位置する不断泉である。1980年代から周辺の宅地化が進み、汚水が流入し廃棄物の捨て場となっていた。荒廃が進むこの出水を訪ねる時は水環境の保全という言葉が空々しく、出水のフィールド研究への意欲も萎み将来への展望も開けなかった。

2000 年を過ぎて久しぶりに墓の井出水を訪れたところ、地域の人々が親水公園として整備に取り組まれるなど、その変身ぶりに驚かされた。出水の姿には、地域の人々の出水との関わり方が直接表れると感じた。

墓の井出水（1984 年 8 月撮影）→



荒廃の進む墓の井出水（1986 年 3 月、1998 年 3 月撮影）

住宅地開発に伴いこの出水の周囲の林は伐採され、下水道未整備のため生活排水が流入しゴミ捨て場と化していた。危険防止のため柵をめぐらし、水利組合による「警告」の立て札もある。その後も荒廃は進み、出水は存在さえ無視されているように感じた。「町を美しく」という立て札がむなしい。

地点 8 「袂井出水」

袂井（たもと）出水は、田村神社の東にある幅 6m、長さ 10m の矩形の浅い池状の出水である。非灌漑期には湧出を停止する一時泉で、地域のシンボルとして一宮郷土振興会によって標柱が立てられた。

（1998 年 12 月撮影）



おわりに

退職と転居のため散逸していた写真のなかから、今回訪ねた出水のものを探しだし、これを現在と比較することで、ここ 40 年間の出水変貌を実感することができた。なお、1980～90 年代の出水についての詳細は、次の文献をご高覧いただきたい。

新見 治（1989）：泉と地下水。地学雑誌、98(2)、111～127。

新見 治（1999）：高松平野の伝統的地下水灌漑システム「出水」—地域の産業遺跡・歴史的遺産—泉と地下水。『讃岐国弘福寺領の調査Ⅱ』高松市教育委員会、294～312。

新見 治・原田真知子（1985）：高松平野における地下水利用の一形態「出水」。『日本水文科学会誌』、15(2)、95～104。

(2) 太田城跡の発掘調査観察記録

安藤みどり

2021年6月29日、太田城跡の一角で、高松市埋蔵文化財センターによる発掘調査が始まった。以後7月10日まで約2週間にわたって行われた発掘調査の様子を紹介する。

太田城は太田上町皿井に所在し、江戸時代中山城山によって著された『全讃史』に「太田城太田村にあり 太田犬養六郎と称す 之に居りき。其の子兼久あり。其の子に兼氏ありき。」とあるように、太田犬養以下3代の居館であった。条里地割を活かして周囲に堀を廻らした方形（1辺約109m）の館である。（注1）

時代ははっきりしないが、おそらく室町時代から戦国時代にかけての開発領主の館であったと思われる。遺構は残っていないが、太田城の時代のものと伝わる井戸が1基残っている。

太田天満宮や近くの祠には、中世の五輪塔や宝篋印塔の部材（凝灰岩製）が多く集められている。

これらは太田城に関する武士の墓や供養塔であったのだろう。

なお、市埋蔵文化財センターが平成28（2016）年に発掘調査

した北西隅からは、近世以降の瓦や建物の攪乱によって中世以前の遺構は見つかっていない。

（『高松市遺跡発掘調査概報』2017年3月高松市教育委員会）



< 6月29日（火） > 発掘初日

横の道を歩いていて発掘調査をしているのを発見。しかも太田城跡の一角。下校途中の小学生も興味をひかれた様子である。

尋ねると、高松市埋蔵文化財センターによる発掘調査で、宅地造成される対象地が埋蔵文化財包蔵地「太田城跡」内に位置するための調査であるという。ぜひ、太田城の遺構を見つけてほしいものだ。



祠に集められた五輪塔などの部材

調査区全体



東側の調査区で多数の柱穴を検出、ただし時代は近世のようだ。



西側調査区からは溝（黒っぽい土）と井戸（？）を検出

<6月30日（水）>



井戸かと思われた穴は、底が浅いので井戸ではなく「野つぼ」のようなものだろうとのこと。測量して記録。野つぼの西側に石組が出土。



<7月2日（金）>

太田郷土史誌研究会の7月定例会の後、メンバーで発掘の様子を見学した。





西側の石組が次第に姿を現してきた。石垣で囲んだ大小2つの貯水池のようだ。石垣の付近から瓦や土器の破片が出土。大きいほうの石垣の隅には割れた石臼（豊島石製）が使われていた。



石臼

< 7月4日（日） >

日時が限られているためか、日曜日でも発掘調査が行われていた。



< 7月6日 (火) >



石の面をきれいに揃え何段にも積んだ石組が出てきた。この石積み遺構は大小2つの貯水池のようだ。大きい方の貯水池の隅には導水路が作られていた。

< 7月10日 (土) >

8日、9日が大雨のため作業中止。今週中には作業を終えなければならないとのことで、今日が最終日。小雨の降る中、作業が進められた。



蓋の石を取り除いた導水路の様子。図面にして記録保存。

<まとめ>

石組の貯水池は出土した土器片などから江戸時代の前半、今から 300 年ぐらい前（徳川綱吉の頃）まで使用されたようだ。東側で出土した柱穴も同じ時期のもの。少なくとも今から 300 年ほど前までは、太田城に由来する何らかの建物があり、人が生活していたのだろう。

なお、このような各地にあった戦国時代以来の居館は江戸時代の初めの頃には全て廃絶されたようだ、とのことであった。

近世の遺構の下をさらに掘り下げれば、中世の太田城の遺構が出たかもしれない。発掘調査の時間が限られていたのが残念だった。



埋め戻された発掘現場

(注 1) 中世の地方武士の館の模型（国立歴史民俗博物館蔵）

堀に囲まれた方形の館。周りに開発した田畑がひろがる。



1 はじめに

250 年余り続いた江戸幕府が終わり 1868 年に明治政府が誕生して以後、日清戦争からアジア太平洋戦争にいたる約 80 年間はまさに「戦争の時代」であった。しかし、戦後 76 年を経た現在、戦争の「記憶」や「記録」はともに失われつつある。そこで、今も太田南地区（高松市太田上町・下町）に残る戦争の「記憶」と「記録」を掘り起こし、記録し、平和の尊さを再認識する機会としたい。

2 伏石神社境内の戦没者顕彰碑と忠魂堂

昭和 40(1965)年 4 月 29 日に建立された太田地区（太田・伏石・松縄・今里）の戦没者顕彰碑である。横に立つ忠魂堂は昭和 3 年 3 月に太田村在郷軍人分会によって建てられ、昭和 40 年に修築されたようだ。顕彰碑裏面の建立趣旨は次の通り。

趣旨

戦は台風の如く地上のすべてを浚って過ぎ去った。そして終戦。愛しの父を夫を子等をも失い廃墟の裡からふるさと再建に苦節二十年戦前を凌ぐ復興を完成するに至った今日の平和新日本繁栄の礎は実に一身一家をかえりみず悲愁の桜と散った地區出身戦没勇士の功績にあるを忘れることはできない。多年の願望である戦没者の忠魂堂修築並に顕彰碑建立は自治会旧軍人関係者遺族厚生会社会福祉関係団体が一体となりさらに全地區住民の協力を得て建設を推し進めることになった。時あたかも千九百六十四年十月東京オリムピックの佳き日を選んで顕彰碑を仰ぎ日清日露の両役をはじめ日支事変大東亜戦争に至るまでの戦没者勇士の遺勲を顕彰し併せて殉国の英霊永劫に神鎮まりますよう祈念すると共に世界恒久の平和を願うものである。

昭和四十年四月二十九日
太田地区戦没者忠魂堂修築並に顕彰碑建設会



顕彰会会長寒川傳 遺族会代表清水喜三郎 亀井伊太郎撰文

戦前の太田村は太田（現在の太田南地区）・伏石・松縄・今里に上福岡を加えた地域であったが、顕彰碑に上福岡は入っていない。

顕彰碑には、全部で 213 人の戦没者の名が刻まれている。内訳は

裏面には「在郷軍人分会之建」と刻まれている。

日清・日露戦争 太田 8 人 伏石 6 人 松縄 2 人 今里 6 人

日支事変大東亜戦争 太田 80 人 伏石 54 人 松縄 26 人 今里 31 人

日清・日露戦争に比べ、日支事変大東亜戦争（現在では日支事変は日中戦争、大東亜戦争はアジア太平洋戦争と呼称されている）がいかに多くの犠牲を強いたかがよく分かる戦没者の数である。

3 徴兵制

1873 年（明治 6 年）に国民の義務として国民皆兵を目指す徴兵令が陸軍省により発布された。男子は満 20 歳に達した時徴兵検査をうけ、合格すれば現役兵として入隊した。

入営挨拶の手紙

（太田郷土史誌研究会蔵）

前文大略御高免下さるべく候。
陳ば、不肖新太郎、一昨三十日徴兵御採用に相成り、余り至急の事にて諸君へ離盃致にも違（いとま）あらず。就いては不都合の段偏に御任免下され候。
扱て、同日午後第七時頃の出船に乗り、其夜十時頃に漸く丸亀に渡り、八嶋屋と云へる宿にて一過仕り、明くる一日午前第十時頃に入営す。仍つて左様御承知下され候。早々
廣嶋鎮台第十二連隊第三大隊第四中隊第三小隊第五小隊第九分隊
明治十七年七月二日
宮脇新太郎拜
前田平太郎君 宮脇惣吉君
真鍋熊太君 宮脇邑多君
宮脇光次君

明治 17（1884）年に徴兵され、丸亀におかれていた第 12 連隊に入営した宮脇新太郎の手紙の翻刻である。友人などに別れの挨拶をする間もなく、慌ただしく入営した様子がよく分かる。手紙は宛名の一人、宮脇光次氏の手元に保管されていた。

広島鎮台は 1873 年から 1888 年まであった日本陸軍の部隊で、当時 6 つあった鎮台の一つ。広島に本営を置き中国地方西部と四国地方に相当する第五軍管を管轄した。四国地方には丸亀を本営とする歩兵第 12 連隊がおかれた。

1888 年に鎮台はそのまま師団に改編されて第 1～第 6 師団となり、近衛師団を加え計 7 個師団となった。広島鎮台はそのまま第 5 師団に移行した。

日清戦争後の軍拡の時代の 1898（明治 31）年に常設師団 6 個師団（第 7～第 12）が増設され計 12 師団となった。四国を管区としたのは第 11 師団で、善通寺村に設置され、丸亀の歩兵第 12 連隊も第 11 師団所属となったのである。第 11 師団の初代師団長は乃木希典である。

4 日清戦争

日清戦争は日本が最初に経験した近代戦争である。明治 27 (1894) 年 7 月 25 日から翌 28 年 4 月 17 日にかけて戦われ、下関講和条約の調印によって終結した。

『讃岐香川郡志』によると太田村では 4 人の戦死者を出しているが、伏石神社の戦没者顕彰碑と照合した結果その内 3 人が太田南地区出身であった。出征数は不明。

5 日露戦争

明治 37 (1904) 年 2 月 8 日から翌 38 年 9 月 5 日にかけて日本とロシアの間で行われた戦争。ポーツマス講和条約の調印によって終結した。

(1) 歩兵第 12 連隊

香川県から出征した者の多くは第 11 師団所属の歩兵第 12 連隊に入隊した。第 11 師団は第 3 軍 (司令官は乃木希典) に属し、旅順攻撃の際多くの犠牲者を出したのは周知の通りである。香川県出征軍人 1 万 8176 人中戦死・戦病死者は 2346 人にのぼった。

太田村からは 138 人が出征し、戦死者は 20 人である。その内、11 名が旅順包囲戦のさなかに亡くなっている。最も多くの戦死者を出したのは明治 37 年 11 月に行われた第 3 回総攻撃で、東鶏冠山のロシア要塞への突撃の際に 9 名が亡くなっている。(『讃岐香川郡志』)

『歩兵第十二聯隊歴史第 3 巻』は、第 3 回総攻撃の際の戦場の様子を「(敵銃弾によって) 兵卒……肉片飛ンデ戦友ノ着服ニ膠着シ、骨片碎ケテ深く土石ヲ打ち、生存将兵ノ顔手、戦友ノ血ニ塗レザルナク、惨状是ニ至テ極マレリ」

と記している。11 月 26 日から始まった第三回総攻撃も前回同様多くの死傷者を出して終わったのである。

余りに多い戦死者の衝撃から、戦後戦没者の慰霊碑などを建立した村や地域が多く、現在も各地で目にすることが出来る。



善通寺駐屯地前に建つ「第十一師団」の石碑



旅順要塞のコンクリート片
(乃木資料館)



日露戦役記念碑 (伊吹島)

(2) 太田村より出征した兵士たちの戦場からの手紙（軍事郵便）



宮脇光次氏あての軍事郵便

(翻刻)
拜啓、時下朝夕餘程冷氣を相催し候処、御尊家御一統様益々御健康の趣恭悦の至りに存じ奉り候。
降りて迂生、出征来無異にて軍務従事随い候間、恐れ乍ら御休心下され度。
却説、貴君爾来御懇切に新聞紙御送付下され、本日十日着、慥かに御拝領仕り候。
偕、時の御訪問亦仕り候処、軍務に取り紛れ延引致し候。敬書相重々候にも拘わらず、御見捨て無く御懇心の段、茲に深く鳴謝奉り候。先ずは愚書を以て御礼芳々。尚、□御家内様の健全と御幸福を禱る。
(明治38年9月12日づけの手紙。「本日十日着」の新聞はポーツマス条約調印を報じたものである。)

宮脇光次氏宛の手紙が30通（内封筒のみが2通）残されている。差出人は8人。

宮脇光次氏は村の長老格で、出征兵士支援の世話役として、遠く中国の前線で戦っている村の若者に慰問品や新聞（香川新報や讃岐実業新聞など）を度々送り、留守宅の面倒も見ていたようだ。そのお礼や近況報告の軍事郵便がたくさん届いていたのである。このような例は他村にもあり、遠く前線で戦う村の若者たちは故郷の新聞を貪るように読んだことだろう。

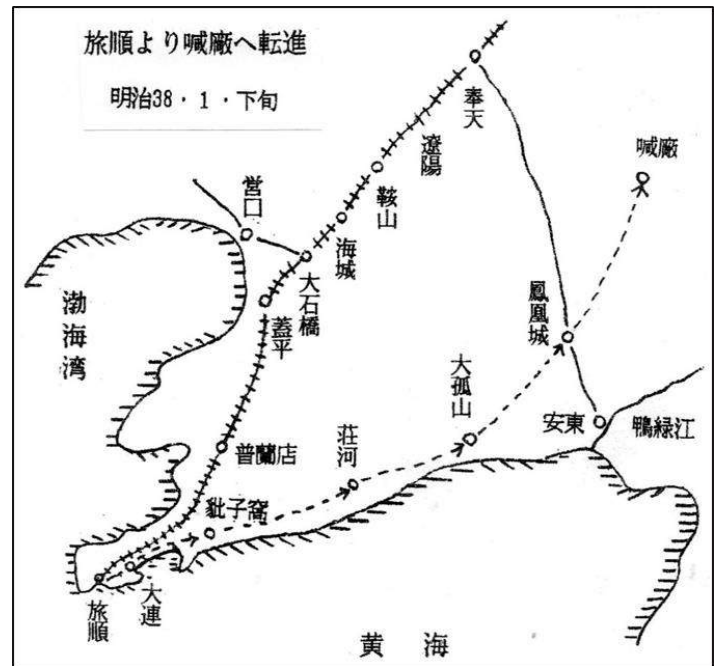
旅順攻略の後、第11師団は第3軍を離れて新編成の鴨緑江（おうりょくこう）軍に入り、一息つく間も無くロシア軍との決戦に間に合うよう厳寒の満洲を徒歩で北へ移動した。奉天会戦は、第11師団の城廠到着の直後の2月22日、鴨緑江軍の撫順方面への進撃開始から始まった。鴨緑江軍はロシア軍総予備隊を引き付けるおとりとなって激戦を戦い、日本軍は辛うじて会戦に勝利したものの、ここでも多くの死傷者を出した。

残された手紙のほとんどは、奉天会戦後に書かれたものである。

戦場と内地との間は思った以上に頻繁に手紙のやり取りがあったようだ。兵士たちは軍務の暇を見てはよく手紙を書き、手紙は10日から半月ほどで太田村に届いた。

彼らは、軍務に淡々とつき、厳寒の冬にも弱音を吐かない。しかし、どの手紙も望郷の念に溢れ、一日も早い凱旋(帰国)を願う気持ちと、留守宅への気遣いに溢れている。「内地農作物の現況」を知らせてほしいという文面には切実なものがある。

日露戦争時の手紙の発掘、紹介はまだほとんど行われていないと聞く。百年の時間の経過を考えれば、大量に出された手紙もそのまま廃棄されていく恐れは大きい。僅か30通とはいえ、発掘できた意義は大きいと思う。(太田郷土史誌研究会蔵 詳しくは「日露戦争と軍事郵便」『太田郷土史誌研究会活動報告書No.4』参照)



『歩兵第十二連隊歴史第三卷』より
(-----→で行軍の経路を加筆)

6 在郷軍人会太田支部

満20歳の徴兵検査を経て招集された兵士は、平時は一定の現役期間(当初は3年、明治22年の改正以後は2年)を終えると除隊して郷里へ帰還できたが、以後も長期にわたり予備役や後備役を勤め、ひとたび戦争が勃発すれば直ちに召集がかかった。1910(明治43)年予備役・後備役の元兵士が半官半民の在郷軍人会に組織され、各府県を単位として支部、市町村を単位として分会がそれぞれ置かれた。在郷軍人会は、一般市民への軍事教育や思想統制にも一定の役割を果たしている。

(1) 道標(大正11年)

道標の裏面には「大正十一年秋 陸軍大演習記念 在郷軍人会太田支部之建」との銘が刻まれている。大正11(1922)年に香川県で行われた陸軍特別大演習を記念して在郷軍人会太田支部がたてたものである。

陸軍特別大演習とは天皇が統監する最大規模の軍事演習で、年1回2個師団以上を対抗させて行われた。

香川県においては11月14日から19日まで、中四国2個師団約3万人の将兵を東西に分けて戦いを繰り広げた。天皇の名代である摂政宮(昭和天皇)が来県し、大本営は高松市の松平別邸(現在の玉藻公園飛雲閣)に置かれた。



三叉路に建つ金毘羅燈籠と在郷軍人会太田支部がたてた道標

摂政官は屋島などの名勝旧蹟や工芸学校なども視察し、市民は大歓迎したという。

その興奮さめやらぬ同年秋に、早くも道標は建てられた。道標は北方面の高松道、安原道、佛生山道の三方向を示し、各地までの里程が分かるようになっている。

(2) 太田競馬場の碑

道池の南側土手にたつ石碑で銘文は右の通りである。

大正 14 (1925) 廣田八幡神社の春祭の賑わいにと在郷軍人会・消防組・青年團が主催して競馬が行われた。走路は廣田八幡神社の北側の森(裏宮)から池の南側の土手を一直線に西から東まで、一回に2, 3頭ずつ競争したらしい。見物人は、参道の松並木の下にむしろを敷いて座り、弁当を食べながら応援した。大変な賑わいだったらしいが、この一回だけで終わったようだ。

道標と石碑は、当時の太田村で在郷軍人会の力が大きかった証である。



7 第一次世界大戦とシベリア出兵

第一次世界大戦は、1914年から1918年まで、計25か国が参加してヨーロッパを戦場として戦われた戦争である。日本は日英同盟を口実に参戦した。1918年ドイツ降伏によって終結し、翌1919年ベルサイユ講和条約が締結された。

シベリア出兵は、大戦のさなかの1918年に起きたロシア革命への連合国(米・日・英・仏)の干渉戦争である。日本は参加国中最大の7万2000人を派兵し、3500人の死傷者を出した。何一つ得ることなく、国内外の非難の内に1922年に撤兵した。

『讃岐香川郡志』によると、太田村より第一次世界大戦への出征兵士は2名(海軍)、シベリア出兵への出征兵士は32名に上る。(陸軍28名・海軍機関兵4名)戦死者は不明。

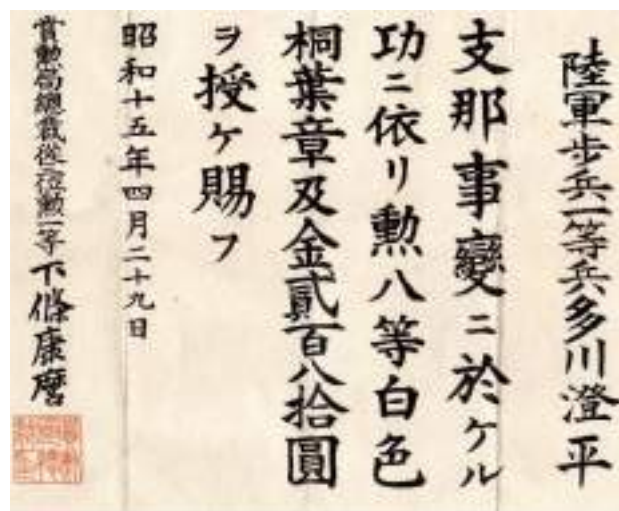
8 支那事変(現在は日中戦争と呼称)

1937(昭和12)年、盧溝橋事件を発端に日中全面戦争(宣戦布告無し)が始まり、1941(昭和16)年アジア・太平洋戦争へと拡大していった。

『讃岐香川郡志』によると、太田村より17名(陸軍13名・海軍4名)が出征した。『郡志』には戦死者は記録されていないが、調査の結果太田南地区で少なくとも3名の戦死者を確認した。

(1) 授賜状 (昭和 15 年)

支那事変に従軍し手柄をたてた多川澄平 (古高松町) に対して、勲章と金 280 円を賜うことを通知したもの。(太田郷土史誌研究会蔵)



(2) 支那事変行賞賜金国庫債券 (しなじへんこうしょうしきんこっこさいけん)



多川澄平に褒美として与えられた 280 円は現金ではなく 200 円と 80 円の債券だった。昭和 35 年 4 月 1 日迄に償還するとしているが、5 年後の昭和 20 年 4 月 1 日に 1 回目の償還を受けただけで、敗戦後は無効となった。(太田郷土史誌研究会蔵)

(3) 予備役・後備役からの臨時召集

中国での戦争が長引くにつれ、現役兵だけでは足りなくなり予備役・後備役からの召集が多くなった。

当時の兵役について説明すると、満 20 歳で兵役に就いたが、これが現役兵で 2 年間。除隊後も予備役（5 年 4 か月）、次が後備兵役（10 年）となって、37 歳にしてやっと兵役終了。その間には何時召集令状が来るか分からない状況だった。まさに 17 年 4 か月の服役である。

前述の多川澄平も予備役だった 23 歳の時に臨時召集され中国に出征している。多川はまだ 20 代であったからよかったが、やがては 30 代の一家の大黒柱も召集されるようになる。30 を過ぎての兵役は体力面からも苦しかったことだろう。

（昭和 16 年の兵役法改正で、予備役と後備役が一つになり、陸軍は現役 2 年予備役 15 年 4 か月、海軍は現役 3 年予備役 12 年となった。）

9 アジア・太平洋戦争～出征した兵士たち～

日中戦争は泥沼化し、日本軍は打開のため東南アジアへと戦線を広げた。そのためアメリカとの対立が激化し、ついに昭和 16（1941）年 12 月 8 日、日本軍はハワイ真珠湾攻撃とマレー半島への上陸作戦で開戦、日本は米・英・蘭など連合国へ宣戦布告した。中国も日本へ正式に宣戦布告し、戦線は中国・東南アジア・太平洋へと拡大した。昭和 20（1945）年 8 月、日本がポツダム宣言を受諾し（無条件降伏）終結した。

ときの東条内閣はこの戦争を大東亜戦争と呼んだが、現在はアジア・太平洋戦争と呼ぶことが多い。大きくは枢軸国（ドイツ・イタリア・日本）と連合国（イギリス・アメリカ・オランダ・中国・ソ連など）が戦った第二次世界大戦に含まれる。

(1) 戦没者の墓

太田南地区内の各所の墓地で見かける上部が尖ったお墓は戦死した兵士の墓である。もちろんすべての戦没者の墓がそのような形（四角柱に頭部が方錐形）をしている訳ではないが、なぜこの形が一般化したのだろうか。

1874（明治 7）年、陸軍省は「陸軍埋葬地ニ葬ルノ法則」により階級による墓碑の規格を統一した規定を制定した。以後、軍の指導があったようで、戦没者は、先祖代々の墓ではなく、四角柱に頭部が方錐形という特有の形の墓に葬られるようになった。

頭部を方錐形にした理由は、剣先を模したという説や儒教や神道の影響、木柱の先頭の腐食を防ぐためなど諸説あるようだ。

石柱の四面には戦没者の名前、所属、いつ、どこで戦死または戦病死したか、その時の年齢、戦いの状況などが刻まれている。戦没者の墓は遺族によって大切に守られお祀りされてきたものである。しかし戦争の現実を語り、不戦の誓いを改めて確認するための貴重な歴史の証人でもあると思う。できれば、戦没者の墓を訪ね、記録し、語り継ぐ活動をしていければと考えている。今後の課題である。



(2) 軍歴証明書と従軍並召集解除除隊帰郷証明書 (太田郷土史誌研究会蔵)



多川澄平は、ニューブリテン島のラバウルから復員し、昭和21(1946)年5月17日名古屋港に上陸して故国の地を踏んだ。右は、その時に名古屋上陸地支局長が出した「従軍並召集解除除隊帰郷証明書」である。ようやく多川にとっての長い軍隊生活が終わったのである。

上の軍歴証明書を見ると多川は兵役が終わった後、京都府繭検定所で農林技手を勤めていた時に日中戦争が始まり、昭和13(1938)年臨時召集された。歩兵第12連隊などで歩兵として戦い、幸い昭和15年12月帰郷して召集解除となった。ところがわずか1年後の翌昭和16年11月にまたもや臨時召集され、歩兵第141連隊配属となり11月14日宇品港を出発した。復員するのは実に4年半後の事であった。

歩兵第141連隊は戦争勃発と同時にフィリピンに上陸して戦い、昭和17年12月にニューブリテン島のラバウルに転戦した部隊である。その間、多川は砲弾の破片が左頭部に当たって野戦病院に入院したり、ラバウルではマラリアに罹ったりもした。何とか無事に復員できた時はさぞ嬉しかったことだろう。

多川は大正4(1915)年生まれ。復員した時は31歳。20歳からの現役、予備役のほとんどを戦場で暮らした世代である。

10 アジア太平洋戦争～銃後の生活～

戦争開始とともに国家を挙げての戦時体制がつくられた。戦費を賄うための貯蓄や国債の



購入が奨励され、食糧や日用品、衣類、燃料が配給制となり、国民生活の隅々まで戦争が入り込んだ。国内での生活は銃後と呼ばれ、国民すべてが戦争に駆り出されたのである。

ここでは『高松の空襲 手記・資料編』や『太田百年』などの文献を中心に戦時下の地域の様子を調べてみたい。

(1) 学童疎開

戦争末期、太田の西法寺に大阪から学童疎開の児童がやってきていたことはあまり知られていないのではないだろうか。

戦況の悪化により昭和 19 (1944) 年 3 月から学童の縁故疎開が始まっていたが、6 月には「学童疎開促進要綱」が閣議決定され国民学校初等科 (注 1) 3～6 年生の児童を対象に、東京・大阪・名古屋・横浜など 12 都市で集団疎開を進めることとなった。

香川県は大阪市港区の 17 校 (児童約 7000 人) を受け入れ、高松市には港区三先国民学校児童 340 人が 9 月 15 日に到着した。児童らは市内のお寺や幼稚園など 9 カ所に分宿し、9 月 19 日には各受け入れ校で入校式が行われたという。

太田上町の西法寺では三先国民学校 6 年 2 組男子 46 名を受け入れ (注 2)、付き添いの坪田憲治先生の引率で太田国民学校に通学した。

『太田百年』に寄せたかつての疎開児童の手紙を読むと、一番驚いたことは学校まで歩いて

30 分もかかることで、さすが都会っ子である。寒い日や雨の日は手足に霜焼ができたりして大変つらかったようだ。暖房もあまりなかった当時、お寺の本堂での就寝はさぞ寒かったことだろう。飢えと親恋しさに脱走する子もいて、近所の人たちみんなで探したこともあったそうだ。

学校では疎開児童だけのクラス編成であったため、地元の子供たちとの交流はあまりなかったようだ。授業の他に作業の時間があり、秋の農繁期には農家に稲刈りの手伝いに行ったり、林飛行場を一日も早く完成させるため動員されて飛行場用地の草抜きをしたりしたそうだ。

時々近所の人が讃岐名物の手打ちうどんを作ってくれたこと、栗林公園や屋島へ遠足に連れて行ってくれたことなど、楽しい思い出も手紙には記されていた。

児童たちは翌年 3 月卒業式のため大阪に帰った。その直後 3 月 13 日の大阪大空襲にあったが、幸い全員無事で三先国民学校を卒業できたそうである。(注 3)



西法寺

(付記)

『高松の空襲』によると、古高松の喜岡寺にいた疎開児童男子 40 名が 6 年生になってからの 1945 年 4 月末に、空襲を避けるため太田上町の光臨寺に移り、太田国民学校に通っていたそうだ。しかし光臨寺も高松市の中心部に近いことから、1 か月半ぐらいて屋島の地蔵寺に再移動したという。短い間とはいえ、光臨寺にも疎開児童が来ていたと知り驚いたものである。



光臨寺本堂

(注 1) 昭和 16 (1941) 年 3 月国民学校令が公布され、

同年 4 月から小学校が国民学校に改められた。初等科 6 年，高等科 2 年で，ほかに特修科 (1 年) をおくこともできた。「皇国ノ道ニ則リテ初等普通教育ヲ施シ国民ノ基礎的鍊成ヲ為ス」ことを目的とし、教科書も軍国主義の内容に改められた。昭和 22 (1947) 年学校教育法の公布により，現在の小学校となった。

(注 2) 『高松の空襲』では 44 名となっているが、『太田百年』掲載の集合写真には 46 名の児童が写っている。

(注 3) 3 月 10 日の東京大空襲でも、卒業を前に疎開から戻って来たばかりの 6 年生が多く巻き込まれている。

(2) 光臨寺梵鐘応召記念写真

戦争の激化に伴い、武器生産に必要な金属が強制的に回収された。光臨寺の梵鐘も応招されることになり、昭和 17 年 12 月 26 日に門徒さん達とのお別れの記念写真が撮られた。西法寺の梵鐘も同時期に供出されている。



(『太田郷土史研究会活動報告書 No. 3』より転載)

(3) 陸軍林飛行場

① 東分の地神さん

太田上町東分の金毘羅さんの祠の隣に五角形の石柱の地神さん（地神社 注1）が祀られている。これはもと林村にあったもので、田んぼの端に打ち捨てられていたのを、東分の人が大切に持ち帰ってここに建てたものだという。林村で何があったのだろうか。

『林村史』によると、林村の役場に陸軍の飛行場設置の第一報が入ったのは戦争末期の昭和 19（1944）年 1 月 23 日だった。林村を中心とした地域（注 2）に飛行場を設置するというのだ。全く寝耳に水の話であったが、軍の命には逆らえず建設予定区域内の村民は立ち退きとなった。強制移転の総戸数は 342 戸で、うち林村は 275 戸（林村の総戸数の約 40%）。家屋や田畑は当時の時価の見積もりで買い上げられ（注 3）、資材欠乏の折から元の家屋を解体して荷車などに乗せて運び、移転地に移築した。男性の多くは徴兵されていたので女性やお年寄りが作業の中心で、しかも 3 月中には移転せよというのだから、その苦労は並大抵のことではなかつただろう。移転先の多くは同じ林村内だったが、周辺の村や町への移転者もいた。太田村には 5 戸が移転している。

この慌ただしさの中では神社はさておき（注 4）、地域にあった祠や地神社の移転までは手が回らず、飛行場建設が始まって邪魔だとほうり捨てられることも多かつたのだろう。東分の地神さんもその中の一つだったのである。



② 飛行機の秘匿

飛行場の建設は一般人、中学生はおろか国民学校児童まで勤労働員して突貫工事で進められ、8 月には東西滑走路が一応完成した。9 月には明野飛行隊が配置され、建設の傍ら飛行の猛訓練が繰り返された。

飛行場では、数十機（終戦時に 65 機確認）の飛行機を米軍機の空爆から守るため、由良山北麓や屋島神社参道の松並木、太田上町の廣田八幡神社、一宮の香東川河原、木太町の大池周辺、観光道路沿道の空地に秘匿した。今でもお年寄りから「茶園墓地や廣田神社に飛行機を隠しとった」というような話を聞くことができる。

「多肥の組立工場から鹿角町の松林まで道路が拡張され、家や社、藪の陰に飛行機が置かれるようになりました。初めは練習機

程度の飛行機でしたが、戦争が激しくなり敵の艦載機が来襲する頃には、新鋭の飛燕、疾風の戦闘機や司令部偵察機等が隠されるようになりました。」（『太田百年』）



かつての軍用林飛行場の範囲（『戦跡を歩く香川県』より作成）現在でも道路の方向が周囲の条里地割の方向と異なるためすぐに見分けられる。戦後は、大幅に縮小されて 1955 年より高松空港として 1989 年まで使用された。

という証言もあり、今の私たちが考える以上に相当な戦闘機が相当数あちこちに隠されていたようだ。

しかし高松空襲の後の1945年7月22日、ついで24日に林飛行場は米軍艦載機グラマンの波状空爆を受け壊滅した。

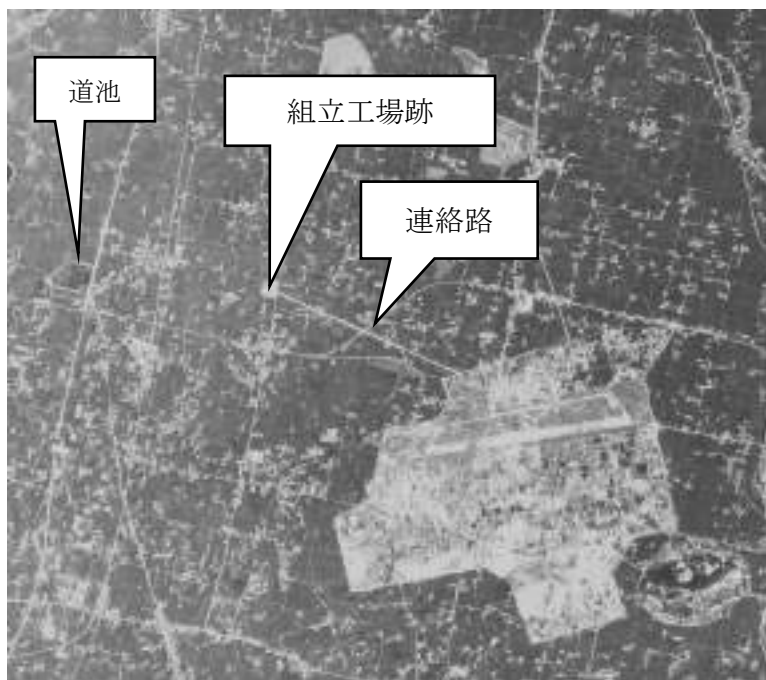
戦後のことだが、11月4日林飛行場に25人の米軍将兵が進駐し、11月9日本土決戦のため秘匿していた飛行機は、全部飛行場に集められ並べて破壊された。高松空襲の時、一機も迎撃せず市民を見殺しにしたのは本土決戦に備えて飛行機の温存を命じられていたためだそうだが、実にばかげたことであった。

③ 倉敷飛行機組立工場と連絡路

倉敷飛行機株式会社（注4）の工場が高松と坂出にあった。高松製作所は松島町（現在の高松商業高校とその付近）にあり、訓練用飛行機を製作した。市内の高等学校生徒（高松高女・市立高女・明善高女）の勤労働員もあって、昭和20年7月4日の空襲で工場が全焼するまで2～30機が製作された。

出来上がった練習機は主翼を外してトラックで牽引輸送されて太田村に隣接する多肥村の組立工場（現在の香川県警機動隊の敷地）に運んだ。組み立てた飛行機は新設された連絡路を通して飛行場に運び、飛行場での試験運転の後、各地に空送された。

この連絡路は終戦後廃道となり、わずかな痕跡のみが残っている。



連絡路の痕跡

1947年米軍撮影 国土地理院提供

太田下町在住の藤村雅範さん（90歳）は、1945年4月14歳で陸軍の少年飛行兵に志願した。以来、この倉敷飛行機高松工場に配属され、工場の南寮で厳しい寮生活を送りながら訓練用の飛行機を作っていた。

ところが高松空襲の前日の7月3日夜、南寮の寮長（配属将校）から突然「寮を閉鎖する。全員今すぐ帰宅せよ」と言われ、すぐに寮を出て真夜中の12時頃太田下町の実家に帰った。喜ぶ家族に囲まれて久しぶりに母の手料理を食べ、就寝したのが4日の未明。結果、空襲を免れたようだ。

4日の朝、南寮（藤塚町）と工場の様子を見に行ったが火勢と煙のためたどり着け

ず、翌日漸く南寮にたどり着いた。爆弾が落ちたのか寮は吹っ飛んで跡形もなかったそうだ。倉敷飛行機の工場は、ギザギザになった屋根がどれも爆弾で吹っ飛ばされ、無残な有様だったという。

寮では残っていた寮母のお婆さんと子どもが庭に掘った防空壕の中で抱き合って亡くなっていたそうだ。無念としか言いようがなかつたろう。

(『太田郷土史誌研究会活動報告書 (No 4)』参照)



倉敷飛行機高松製作所の焼け跡
(高松市平和祈念館提供)

コラム 南国市の戦争遺跡

「高知県南国市の前浜掩体群 (南国市史跡)」

高知龍馬空港の前身は、1944年高知海軍航空隊の飛行場として林飛行場同様三島村の住民を強制的に立ち退かせてつくられた本土決戦のための軍用飛行場である。掩体 (えんたい) とは飛行機の格納庫で、滑走路の付近に中小40以上あったようだ。現在は高知空港近くに点在するコンクリート製のものが7基だけ、田んぼの中

に残っていて、一見不思議な光景となっている。アメリカのグラマン戦闘機の激しい機銃掃射を受けた弾痕跡が残っているものもある。

戦争遺産として2006年市指定の史跡となった。
林飛行場では掩体は造られていない。



2号掩体



7号掩体



5号掩体 (上)
内部の様子 (右)



(注 1) 「土地の神」「農業の神」と信じられ、太田南地区では 8カ所に祀られている。

五角柱の石材を用い、それぞれの面にそれぞれの神名を彫ったものが多い。

(注 2) 飛行場用地は、林村を中心に川島町、三谷村、多肥村の 4か町村で 275 町歩。うち林村は約 179 町歩。

(注 3) 普通上田 1 反歩が 1440 円。

(注 4) 立ち退き地域内にあった岩田神社と拝師神社は六条鹿島神社に合祀することになり、後日三神を合祀し社名を三宮神社とした。

(注 5) 東京飛行機高松製作所が倉敷紡績に買収されてできた会社。昭和 19 年 10 月に倉敷飛行機と改称された。

(4) 高松空襲

高松市は 1945 年 7 月 4 日午前 2 時 56 分から午前 4 時 42 分にかけて、アメリカ軍の爆撃機ボーイング B29 およそ 116 機によって焼夷弾などによる激しい爆撃を受けた。市街地の約 80%が焦土となり、1359 人が死亡した。(注 1)

① 太田下町の被災

高松空襲の時、太田下町(注 2)でも 3 軒が B29 の焼夷弾爆撃で焼失している。『高松の空襲』によると次のような状況であった。

高松市街の猛爆がようやく終わりに近づきつつあった午前 4 時ごろ、琴平方面から林飛行場の方に飛来した B29 一機が塩江街道をクロスしながら焼夷弾を連続投下していった。塩江街道の破壊と高圧送電線の切断を狙ったものか、この爆撃で送電線が切られ高松全市が停電している。この爆撃の中で、太田下町西下所にあった 21 軒のうち 3 軒が焼夷弾の直撃を受け燃え上がった。塩江街道の西側にあった 2 軒と東側にあった 1 軒(Y さん宅)である。

その時の様子を Y さん(聞き取り当時 48 歳)が次のように語っている。(『高松の空襲』よりの引用)

「爆撃の間、そりゃふるえながら家から 100m 近く西に寄ったところから、家が焼け落ちるのを見ていたんですよ。明け方、焼けた家を見に戻ったんだけど、焼夷弾が母屋に 8 本、納屋に 13 本つきささっていたね。牛を 1 頭飼っていたんで、どうなったものかとすぐに納屋に行ったら、生きていてね。牛のところに近づいた途端、牛が不発弾を踏んでいたんだね、それが突然爆発したんですよ。左半身をやられてしまった。左眼失明、左手から腕、胸、肩にかけて今もほら、傷が残っているでしょう。1 年はこの傷で苦しみましたね。私のところは当時妹と二人切だった。私、16 才だったね。父母は相次いで 1941 (昭和 16) 年に病死しましてね。長兄と次兄がいたんだけど、二人とも確か 1942 年と 1943 年だったと思うけど、召集されて外地に引き出されちゃった。こんな具合だからどうしようもなく、行っていた学校はもうすぐやめ、戦後はこれ以上ないといった貧乏暮らしを余儀なくされてね。とても人間とはいえなかったね。約半年三条町の親せきの家にて、元の所に戻ってバラック生活を妹と送ったね。近所の手助け? そんな余裕なんか無かったんだろうね。何もなしでしたよ。」

② 高松空襲と太田南地区

太田南地区において、当夜高松空襲を目撃した人は多かっただろう。その一人、前述の藤村さんの証言を引用する。

「私が寝床についたころは、もう7月4日の朝近くになっていた。

ドドド・・・と、台所の窓ガラスが大きく響いた。北の空がうっすらと赤くなり、ウォーンウォーンと飛行機の爆音、『アッ、B29だ。空襲だ』高松がやられだした。弾は空中で炸裂し、小さな火の玉となって滝のように降り注いでいる。ドドン、ドドンと大きな爆弾の破裂する音も聞こえる。

B29の機影が下からの光ではっきり映っている。何機かが見える。屋島の北端あたりから打ち上げる高射砲の赤い弾が、どれも放射線を描いて地上に落ちる。B29は、赤い弾の到達高度を知ってか、少し高いところをすれすれに飛ぶからだ。撃ち上げた弾がB29の近くで破裂することもあった。B29の大きな翼がかすかに揺れた。

やがて、北の空は真っ赤に染まり、サイレンの音、半鐘の音、家の燃える音、逃げ惑う人の叫びが、ザワーという轟音となって響く。

紫雲山の北あたりから、屋島の西にかけて、白や黒の煙と赤い炎とキラキラする何物かが輝き、空全体が逆巻いて見える。

東の空が白みだした。私の家の近くの伏石多肥街道は、逃げる被災者で行列である。焼け焦げた布団を抱えた親子。手に手に持てるだけもっている年寄り連れ、何も持たずに、ただ呆然とする若者、話す人は誰もいない。

もう、空は薄っすらと明るくなった。空襲は終わった。町は一面の煙である。(後略)

(『太田郷土史誌研究会活動報告書(No4)』藤村雅範「高松空襲体験録」より)



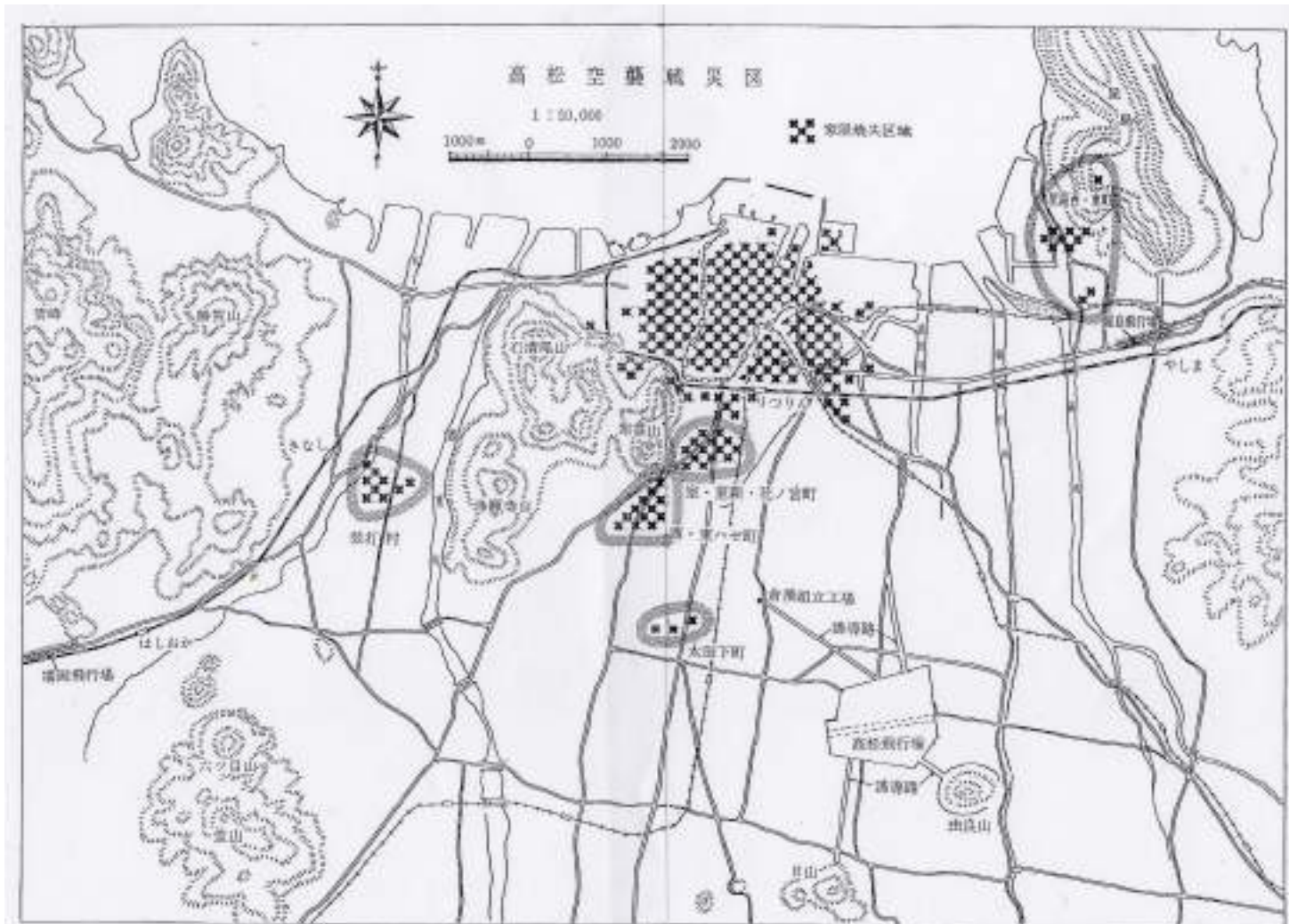
太田小学校前を北(市街地方面)に伸びる伏石道。高松空襲の際、多くの人々がこの道を通って避難してきた。太田国民学校(注3)が臨時の避難所となっている。

(伏石道は明治43(1910)年に起工、6年後の大正2(1913)年に漸く完成した。これにより児童の通学が大変便利になり大層喜ばれたそうだ。開通の記念碑(写真右)が伏石神社の前に建てられている。)

地方都市への米軍の爆撃が激しくなり、防衛のため高松へも高射砲隊が6月中に配備され、高松市東浜（現朝日町）に駐屯していたそうだ。一個中隊で、大砲6門を備えていたといい、藤村氏が見た「屋島の北端あたりから打ち上げる高射砲」はこれだろう。しかし、応戦するもB29には届かずむなしく放物線を描いて落ちていただけだった。

この後、7月23日、24日と林飛行場を攻撃目標にした空襲があった。特に24日には艦載機数十機による波状攻撃によって飛行場は壊滅するのだが、その時太田駅の北方に爆弾2個が落ちている。線路横断りに大きな穴が開いていたそうだ。

(注1) 高松空襲戦災図 (『高松空襲戦災誌』より)



「高松空襲戦災図」を見ると焼夷弾によって焼失したのは旧市街地だけでなく、新市街地の西・東ハゼ町、太田下町、屋島西・東町などにも及び、さらに浄願寺山の西側の弦打村にも及んでいる。

この時は高松飛行場（林）と組立工場、誘導路などには被害はなかったが、7月24日の空襲で壊滅したことは前述の通りである。

(注2) 太田村は昭和15(1940)年に高松市に編入し、現在の太田南地区は太田上町、太田下町となった。

(注3) 昭和16年に尋常小学校は国民学校と改称され、教育の国家主義的軍国主義的色彩が

一段と強くなった。当時の太田国民学校は、初等科6年で、高等科（2年制）を併設していた。昭和22年4月学制改革により国民学校は小学校となり、高松市立太田国民学校も高松市立太田小学校となった。

昭和51（1976）年4月1日高松市立太田南小学校が新設されるまで、太田上町・下町（太田南地区）の子ども達も太田小学校に通っていた。

11 おわりに

本稿は、太田南地区に関わる戦争の「記憶」や「記録」について、とりあえず現時点で集められたものを記録したものである。戦後75年、戦争について語れる戦争体験者はずいぶん少なくなっている。今後は、戦争遺跡や戦争を記録した“モノ”に戦争を語らせていくことがますます大切になるだろう。今後も戦争にかかわる調査を進め、資料収集に努めていきたい。

参考文献

- 『讃岐香川郡志』（昭和19年）
- 『歩兵第十二聯隊歴史 第三卷』（小野寺宏編 平成11年）
- 『太田農協史』（昭和55年）
- 『林村史』（昭和33年）
- 『高松空襲戦災誌』（昭和58年）
- 『高松百年史 上下』（高松市 1989—1990年）
- 『高松の空襲 手記・資料編』（高松空襲を記録する会 1978年）
- 『親子で語る高松平和ガイドブック』（高松市平和を願う市民団体協議会 1998年）
- 『戦跡を歩く 香川県』（1998年）
- 『太田百年』（高松市立太田小学校 平成9年）
- 『特別展 戦争があったころ』（東かがわ市歴史民俗資料館 2008年）
- 『別冊太陽 戦時下の暮らし』（小泉和子監修 2020年）

編集後記

活動報告書は、毎年度の活動を記録するとともに、調査・研究した成果を整理・保管することにより、研究会の活動の成果を積み重ねていくことに重点をおいている。

そのため、本編を大きく「活動編」と「調査・研究編」に分け整理し、それを毎年積み重ねていくこととしている。

太田南コミュニティ協議会が策定した「第2次コミュニティプラン」に「地域の歴史・文化の継承」が目標の一つにあげられており、当研究会の活動がその目的に少しでも寄与出来ることを願っている。

2021年度は新型コロナウイルスの脅威を何とか乗り越えつつある1年であった。太田郷土史誌研究会でも、油断することなく3密回避とマスクの着用、太田南コミュニティセンターの努力のおかげで、特に支障なく活動ができた。

今後、太田南地区に残された貴重な資料やこれまで調査・研究した成果を展示し、地区の皆様が気軽に立ち寄り、見ることができる場所が確保されることを期待したい。

本年度の活動報告書は、以下のメンバーが毎月1回会合や現地調査を行い取り纏めたものである。

明石豊重	東 秀憲	安藤みどり	伊澤貴大	井上和也	大住教夫
十川信孝	中澤健二	藤村雅範	古澤幸夫	真鍋正彦	三浦真里
山下智子					

事務局長 古澤幸夫